





明顯山祐天寺

同所西の方五丁斗と隔つ善久院と号中

草創

二世祐海和尚祐天大僧正の遺跡の地を奉じて當寺と

則祐天大僧正を開祖と

常行念佛の道場中

毎

聲ハ山林ハ谿研せり

此和名ハ岡山祐天大僧正臨終の期開闢

十六日あり同廿五日に至る迄の間阿弥陀經千部讀誦修行道俗

群衆

本堂 本尊阿弥陀如来 如來 五尺一尺 惠心僧都の作中々岡山生涯

持念の像なり

岡山祐天大僧正真像

等身佛中々八十二歳の

鯨鐘 堂前右の方庫裡の前より

圓光大師堂

同並ひふ阿内國小天野

常小上人の記念中々自願造り送り霊像なりと故あり

經藏 堂前左の方中々願經藏 阿弥陀堂 同左並岡山信授佛と号









この題は則僧都一代彫刻の出来此尊像を拜して彫りあり此号ありと云  
開山大僧正常仁有信の輩は浄業傳法の時の彼後佛たりと縁起あり此号ありと云  
額阿彌陀堂の四字は相荷祠の護法神あり當寺地藏堂同並ひ二王門ありと云  
本持佛と稱し多あり惠心僧都の作なり長二尺五寸あり元信州七本の光明院  
に安置せし寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失ひ享保三年戊戌  
七月十五日開山遺像の心不至此聖像再ひ光明院へ移り頭より松本の城主出羽守  
水野忠勝侯の夢中開山の本地に地藏像ありと云其書簡令當寺に授けられたる  
才二世後海上人へ送りせられたる其書簡令當寺に授けられたる其書簡令當寺  
松本の城主倉品七郎右衛門より人往来の因縁ありと云後之の城主丹波守松平光行侯  
にひ同年十二月廿三日當寺へ送りしなりぬ

二王門表の左右に那羅延密迹の二像裏ハ持國廣目の二天と

置額明頭山祐海和尚筆

開山祐天大僧正廟

開山八十歳影像

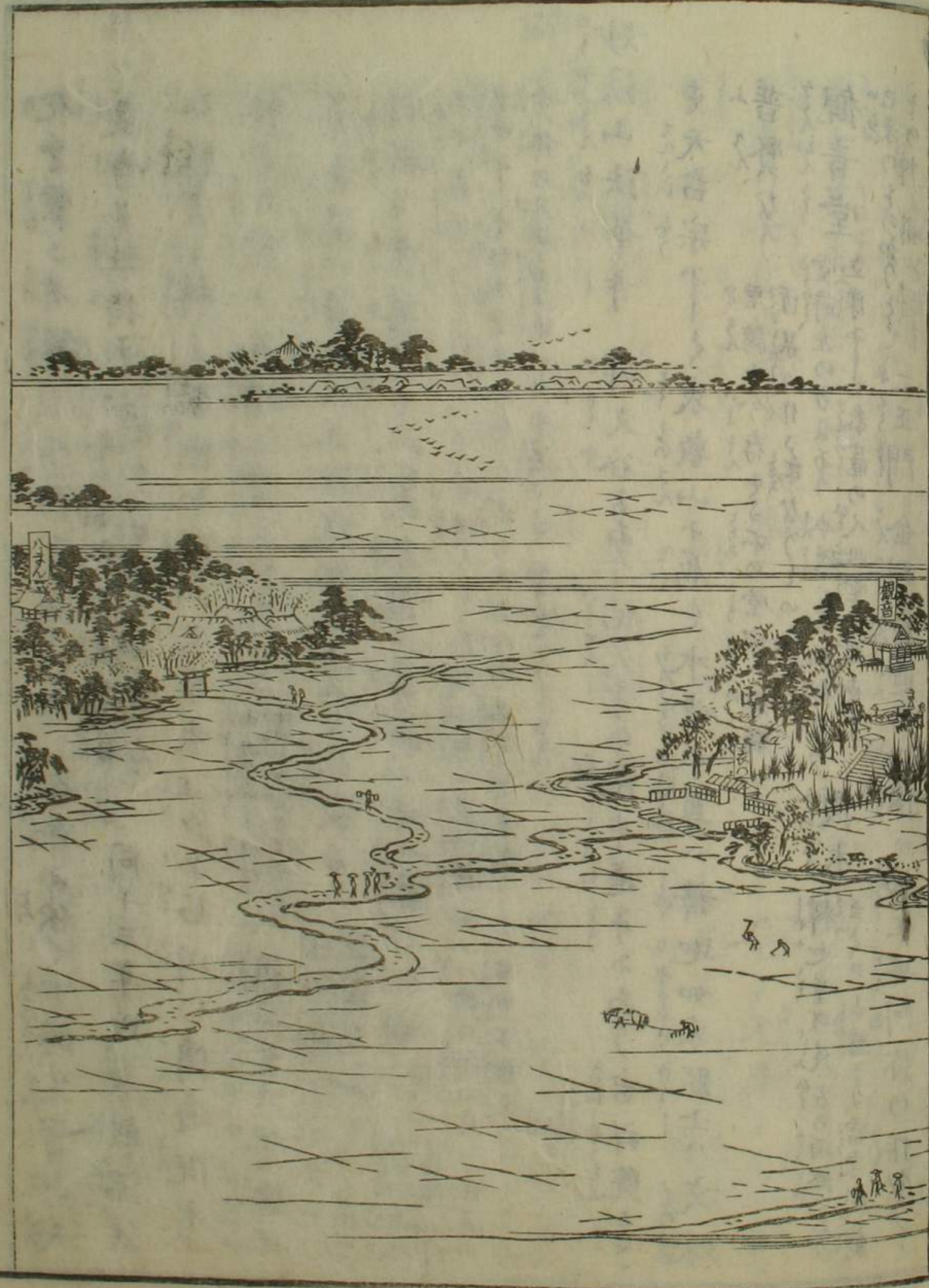
同舌根

開山遺骨舍利

この化導に委語あり開山大僧正書写六字名号奇特なる事就中刻難七火  
中出現不焼名号宛倉守名号の現益普く世に奇持なりと云  
寺記のゆかりあり開山大僧正長悦像開山石川の傳通院在住の頃元禄年中  
瑞春院殿御感賞のあまり御親筆の首座まつねと云  
上意あり鶴姫君御進進と云御親筆の首座まつねと云  
上人へありて當寺に収む此故小毎年蜀江錦九條袈裟増上寺在住の頃開上人  
三月當寺に御雑祭の儀式あり累濟度如法衣二十五條なり累下徳園岡田郡井生村  
御法号を御雑祭の儀式あり累濟度如法衣二十五條なり累下徳園岡田郡井生村  
御親筆と送りありと云  
惡女あり心なき者ありハ与右の邊を惡之情あり正保四年丁亥八月十日  
信川との川へ突落し我と後死骸を八同村あり浄家法蔵寺と云る華  
開山大僧正の化益あり寛文十二年壬子三月十日の夜に至り累下六年の怨執悉く散  
いて生死解脱の懐と達せし普く世に奇持なりと云  
州紙の事あり

開山明蓮社顯譽上人  
西村善内と云る者の子なり寛永  
十九年壬午正月元日生幼名三之助と云  
檀通和尚小従ひ縁山は修学  
をせし知る所の累々怨靈解脱の譽ハ尤著  
檀通和尚の歳三十六其頂  
在住し其時の現益あり怨靈  
解脱物語として州紙に詳あり後故ありて武州牛島は潛居す道俗





碑ひ文ぶん谷や  
法ほ華け寺じ



化を蒙る者夥し元禄十二年己卯 台命不依て下總生實の大  
巖寺に住持し 牛島の庵室より直に大巖寺の  
弘経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未 江戸小石川の傳通院より  
移り正徳元年増二寺に住せしむる 大僧正に任せしむる  
後目黒の地へ隱栖  
せしむる竟小享保三年戊戌七月十五日化寂あり  
行状并書寫しあり所の名號の奇特ハ世人普く知所あり  
名号書寫を怠りし人ありて是をよむ 開山云く 惠心僧都ハ一期の間來て彫造し  
其中中々 往生を遂られしを 我も又弥陀の各号と書寫し 其中に 往生をすしとく  
余終の日不 忽一日も怠りしを 我も又弥陀の各号と書寫し 其中に 往生をすしとく

妙法山法華寺

碑文谷にあり 祐天寺の南半道斗ふあり 吉祥院と号  
也天台宗中々 東叡山に屬す 本堂本尊ハ釋迦如來 胎土ハ文殊  
普賢なり 里諺ハ今存する所の堂宇ハ飛驒  
觀音堂 堂前左の方ハあり 本堂ハ上面觀音の  
己來のものとあり 二王門 金剛密迹の二像ハ 佛工安阿弥の作りと  
その村に垣を築す

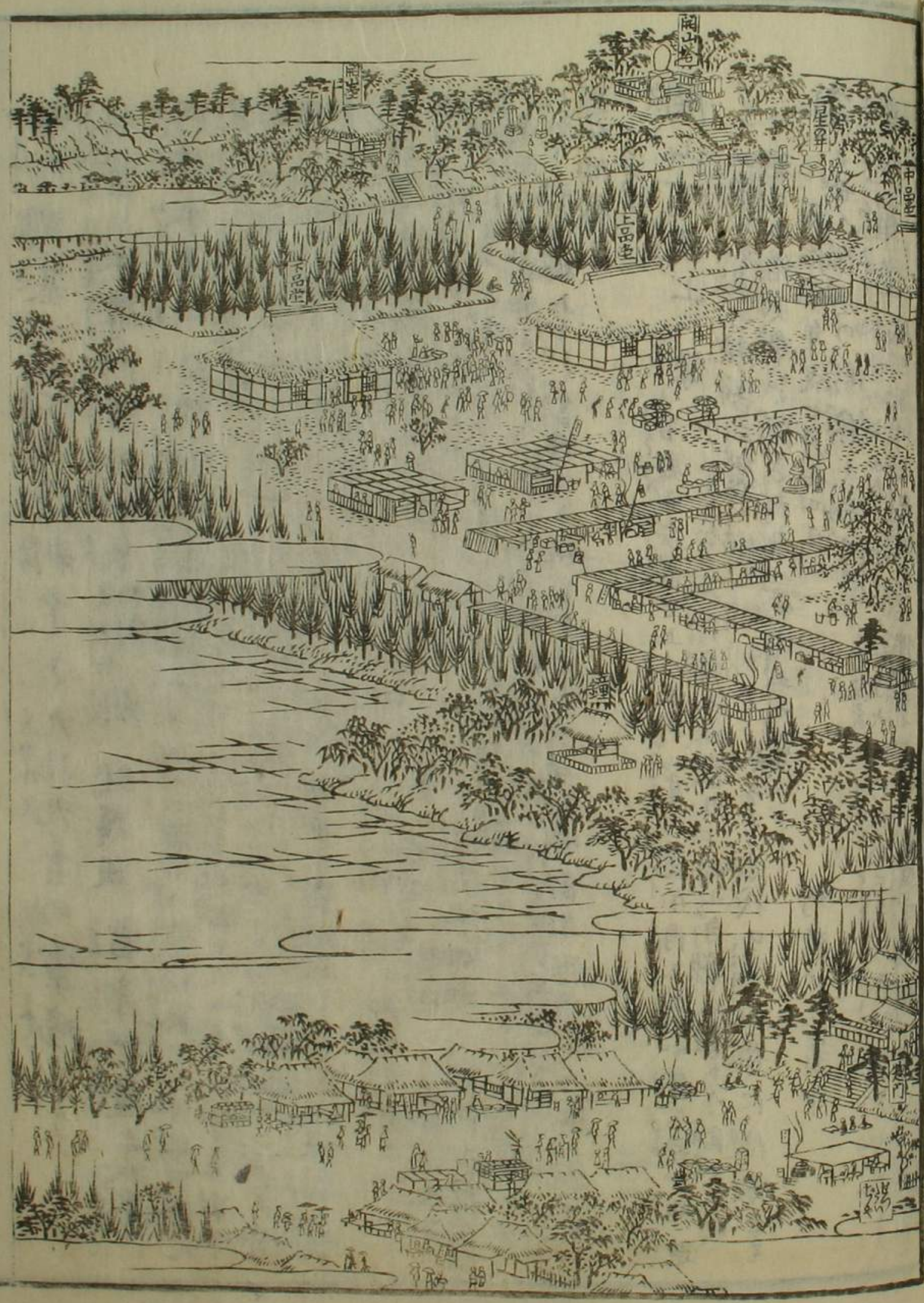
碑文谷八幡宮

同所耕田を隔て 南の方一町斗ふあり 相傳ハ島山  
重忠の崇信せし 神ありとのみ 神縣ハ秘物ありと云或ハ云  
別當ハ天台宗中々 法華寺末神宮院奉祀とす 昔ハ此地の農  
人社司たりしあり 此宮氏ハ重忠の家臣の遠裔ありとのみ 或人云八幡宮の西に市あり地ハ  
往古の後倉街道あり 路傍に古碑あり 或ハ日源上人ハ卒都婆ハ碑文を書きて埋めし  
鐵守八幡宮の社地ハ埋藏し 或ハ日源上人ハ卒都婆ハ碑文を書きて埋めし  
かの名なりともあり 又江戸鹿子との草帝ハ忠致とす 砂門卒都婆一基を建

九品山淨真寺

碑文谷より一里ありを隔て 西南の方奥澤村にあり  
淨土宗中々 唯在念佛院と号 京師知恩院 延宝六年戊午珂碩





奥澤村  
浄真寺  
九品佛



和尚開基する所の浄刹なり九品九會の靈場なり

本堂 本尊阿彌陀如来 丈六の額 龍護殿 當寺珂慶上人筆

内佛 本尊阿彌陀如来像 聖德太子四十二歳の時一切衆生の災難を除く

靈岸寺の傍に庵室をむすひ念佛修行をすまふ所あり

賤の道俗利益をむすむ者少く成すべしとて九品佛彫造の資財を乞ふ

地蔵尊 本堂の向小堂の中安置を岡山珂碩上人の本地佛と稱す惠心僧都の作り

一慶死し其時を憐れむるに自冠の笠を被ひて堂宇破壊し佛髻雨露の爲

曼陀羅堂 此像ハ如来の教告三慶に依りて現刻せしなり未代の筆此像に結縁せし

珂碩四十二歳印

中品堂 同右小並入中品中生中品上生中品下生以上

上品堂 本品堂の阿彌陀如来像を安置す

下品堂 同左小並入下品中生下品上生下品下生以上

開山堂 上品堂の後古城跡堤の上あり

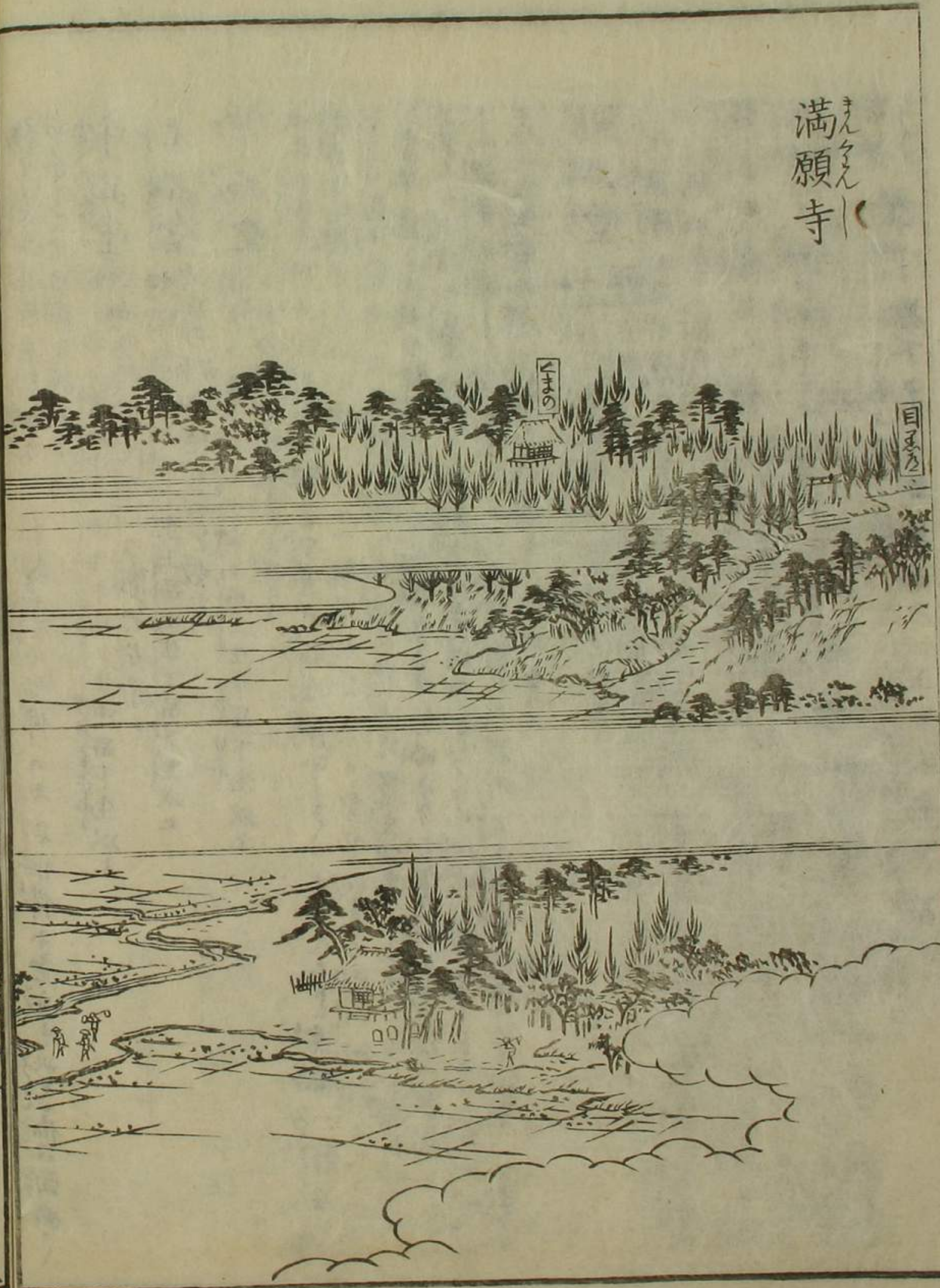
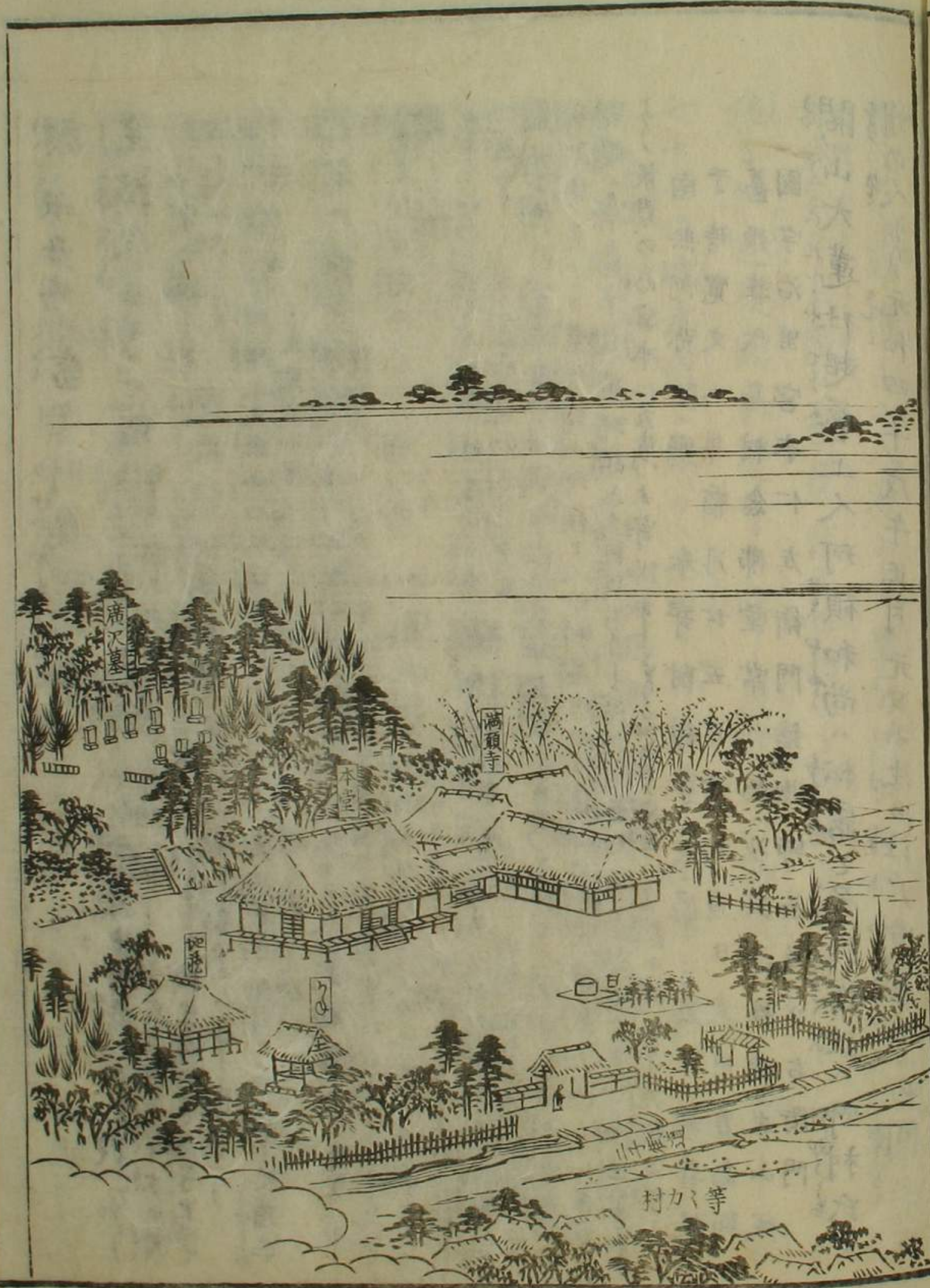
開山珂碩上人廟 聖徳太子の右のつぎあり興の院と

有信の人偏小稱名を白日とて鐘樓 本堂の右あり九品の阿彌陀如来の

鯨鐘樓門 同小あり樓上中を二十五菩薩の像を安置す

樓下中を金剛密迹の二玉の木像を置り





満願寺

村カ等



額 般舟場 當寺 珂慶和尚筆

芝枯大名号 一幅 張十三間巾九尺拍布十反を合用中珂慶上人の筆なり

十念名号 珂碩上人臨終の項筆せしむる其の筆の別を惜みて清西

亡者の帷子 後珂碩上人の十念願符と授け眞府の苦を道れ成佛して死す

置る帷子 あまりの先妻の亡霊後妻の一文 攝待大茶金 當寺に収む毎年四月十日の時

不通 衆人は施に寛文中山城守治の茶師宮本仁左衛門とつとる人継母の念念小より

病癒 病癒す其項珂碩上人再興あり深川大島村常念佛堂の堂守浄正のそり

南無阿弥陀佛 奉寄附罐子一口 為二親菩提

于時寛文八年霜月廿五日當九百日武州豊島郡

葛西莊大島村念佛堂常住物沙弥淨性施主山城

開山大蓮社超譽上人珂碩和尚ハ松露と号し俗姓ハ野村氏武

州の人なり元和四年戊午正月元日小生る江戸覺真寺の圓若に

投し雜凍一十八歳あり業を珂山和尚より受 珂山和尚は下總

和尚後年武陵の靈巖寺に住持す項師も亦後つゝかゝりに

移る初越後國泰叟寺に住し後此地の郷民の招に應り一歳

七十七の時武州に歸り世田ヶ谷奥澤に幽棲を 當寺 遂に元祿

七年甲戌十月七日化寂す 本朝浄土高僧傳に元祿八年報壽 師の姿貌

温雅中々慈恩尤峻く奇驗孔多凡在世の感應ハ勝教を

へり其の最煥灼と人々是を傳ふ 以上浄土傳燈系圖上人 傳本朝浄土高僧傳の

當寺ハ不斷念佛の道場中々閑寂玄隱の浄舎なり 毎年

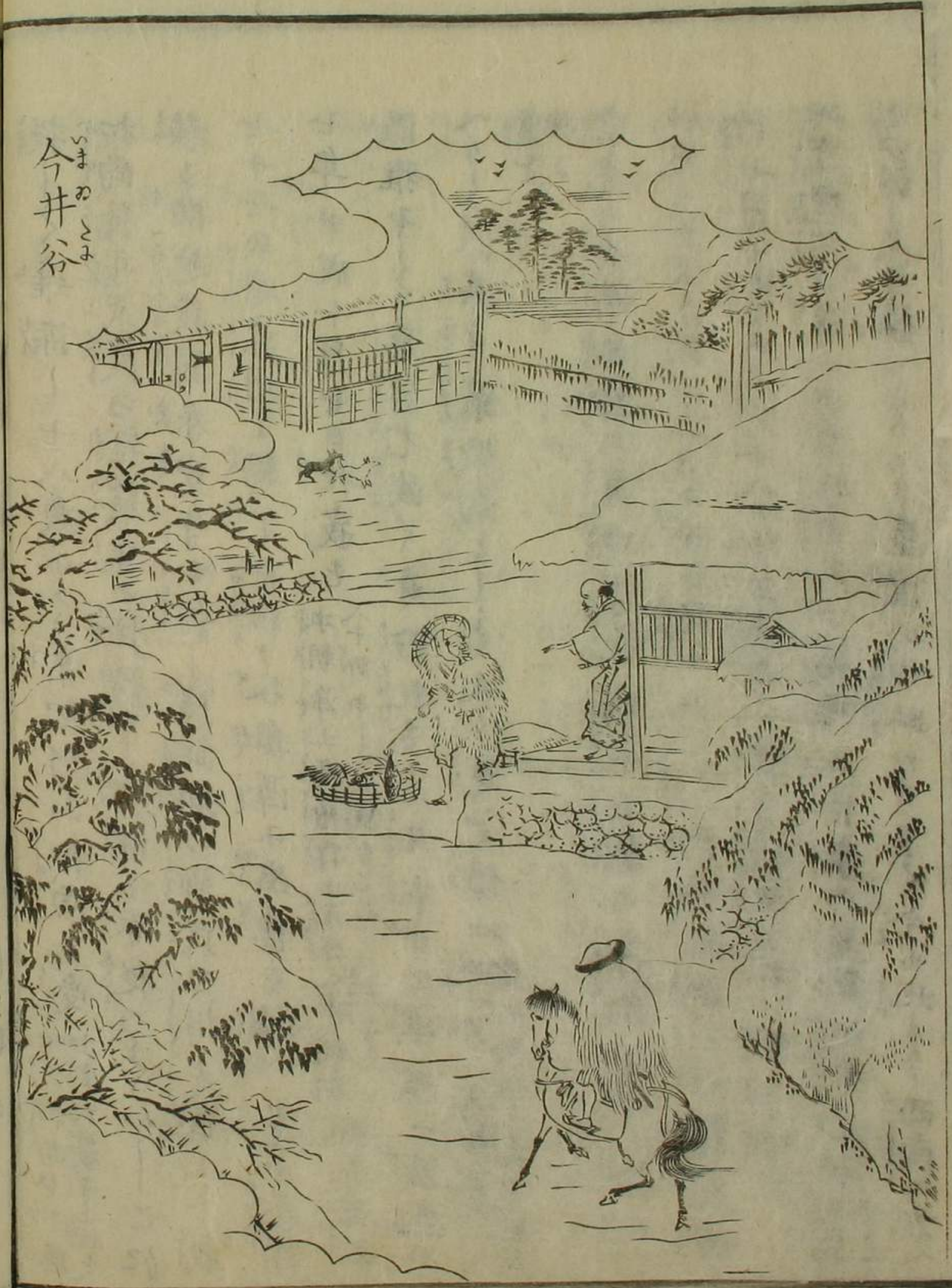
四月三日より同十二日小至る迄十日の間阿弥陀經千部讀誦修

行七月十六日より同十八日追由拂ゆく當寺什宝を 諸人小拜せしむ

此寺境内ハ昔小田原北条家の属將吉良家の老臣大平左馬 或崩

といひ人の構へり墨隍の旧跡なりと今北より西南の方へ





今井谷

傍々々々境の形空堀の跡と存す後門の方ハ大沼ありありとあり今ハ耕田とあり

大平山 奥澤新田村あり大平出羽守の砦の跡ありとあり

按 大平清九郎と云々名往見え

致航山 満願寺 二子街道等々カ村道より右ふあり新義の真言

宗中々々山城醍醐報恩院ノ属を開創の時世詳あり中興

開基を定栄法印と号し慶安年間寺領に寄附の朱章をあり

本尊ハ大日如来なり當寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈

願所中々々其頃ハ頗る盛大の寺院なりとあり

世田谷私記追如小云

経舞住職を豪徳寺所蔵の吉良系圖あり政忠の子経舞満願寺あり當寺ハ

天文弘治大正等の年号あり吉良頼康北條氏康政等の證状あり書簡あり十八通

あり其文中ハ世田谷深澤村の満願寺とあり其故を去る昔等々ハ深澤ノ属ハ

中一通ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆

致航山ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆

中一通ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆

致航山ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆

中一通ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆

致航山ハ更ヤハ人ヲ着可卷ノハ後世 總門の額致航山の三大字ハ小篆



息男九阜の書なり

又若村幸實は十貫寄納石井戸新開助中満預寺へ一貫分  
 又淡七百六十貫寄納。又二百六十貫寄納  
 若村十一貫寄納。又田分二十貫寄納  
 沼戸河東十二貫寄納。又沼分五貫寄納  
 弘治二年丙辰十二月十八日

吉良  
 印家  
 朱

世田若村内満預寺より石井戸新開助中満預寺へ一貫分  
 再録有るは移以て動行しむ修く若く是細村系依後守りり分  
 忍く致白

天文廿一年壬子二月文書日

左満預判  
 堂音寺

世田若村内満預寺分致り奉法致りり一向有る者  
 為後日院状也併

天文二十三年甲寅正月文書日

本丸若村依頼康判  
 満預寺

然醫主山満預寺再興て為永代法致不入若く是屬若く子孫  
 不う有る者仍も為後日院状也併

甲寅二月文書日

本丸若村依頼康判  
 満預寺

此古文書満預寺ゆりり農家より散在しむ全くはとり

廣澤先生之墓 同 境内堂より後の方岳の上あり

廣澤先生ハ細井氏通稱を次郎大夫と稱へり或ハ思給菴蕉林庵等の号あり  
 江戸に遊んで書法を雪山にまゐりて善冠神ノ柳澤侯は任ふ後致仕し城西  
 龍山に隠る紫微字様觀鸞百譚撥鏡真詮篆體異同歌奇文不載酒字標長歌  
 等の著述あり碑面左の如し

正面 廣澤先生細井君之墓  
 左面 豪徳院不孤有鄰大居士  
 背面 諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏

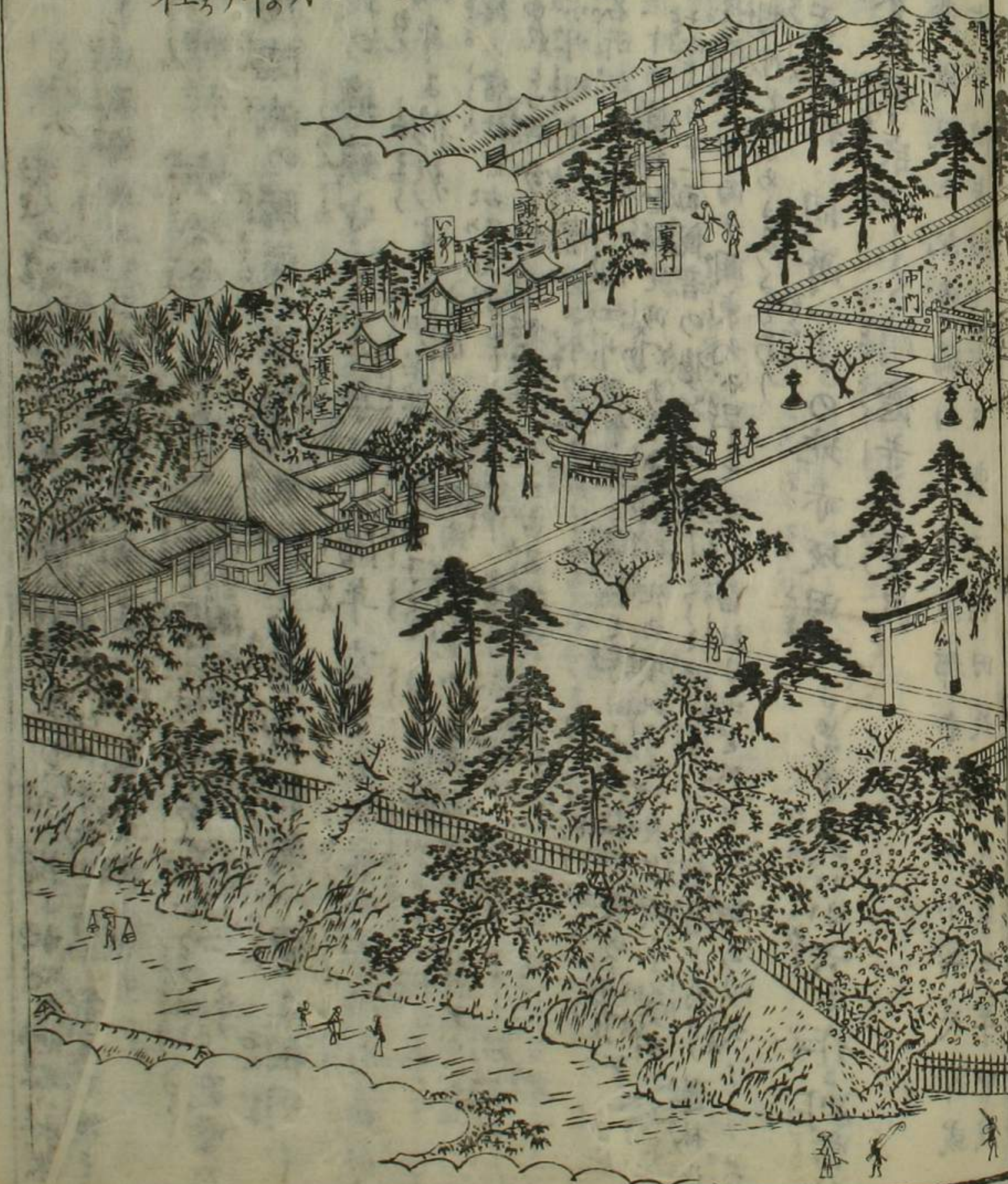
右面 生遠州元年戊戌十月乙亥八日壬申  
 享保二十年己卯十二月己丑廿三  
 日戊子卒于江戸城西于寢享年七  
 十八

孝子知文建

赤坂御門 糺町の方より青山へ初道赤坂への出口あり此御門は  
 北斗形とく江戸御城の西構へ多き中を殊更勝く繩張  
 其の先生の父母及息男九阜等並に細井一家の塋域と稱し垣をめぐり  
 其の中より同姓の人の墓碑あり孝子知文は則九阜の弟を奉り



赤坂の水川社





なりとのいふ 或人の説は赤坂の山頂の坂ありて云と按は赤坂の地名も永祿  
二年の武蔵國風土記に在る郡赤坂にあり今ハ豊島郡に屬す

水川明神社 赤坂今井小あり 此坂は世よ三河臺といふ天和の頃松平別當ハ

聖護院汎の觸頭也 大衆院と云祭神當國一宮は相同し

赤坂の總鎮守也 祭礼ハ隔年六月十五日 永田馬場山王権現

と隔年ハ修修す 事傳十五年己酉今の地ハ座社を造宮ありと云

按小當社を古呂故宮といふ事傳中一木あり今の地ハ座社を造宮ありと云

水川明神同會國今の地ハ計ありて死ハ名別の社あり

念三十一の觀行を擬せしあり東國遊化の頃此坂ハ一夜ハ明の法下を

古呂故天神社 同所一本の地赤坂田町あり或ハ小六ハ作別當ハ

洞家の禪宗中々清徳寺と号す 荏原郡赤坂庄小六天神或

武蔵國風土記殘編曰 荏原郡赤坂庄小六天神或

十一月始行神禮有神戶巫戸所祭大已貴與必彦

名園韓神也 珥小六者以古呂故岡之名也云云

按紫の一本ハ大明神元當國八王子の辺ハ水呂子と云あり其所の

水川明神を此坂の道灌の書ハ水呂子の墓と云ありと云又同書

及ハ江戸名所結小の書ハ慶長の頃關東の小六と云美艷の女と云

あり此坂ハ住を常ハ水川明神と云信ハ後其家富又依て社の破壞を

再修す故ハ後ハ小六の宮と云れと云詳ハ江戸名所結小ハ明神を

時本武蔵の無跡ありと云諸説紛々といふ詳ハ江戸名所結小ハ明神を

信康山龍泉寺 同所一木町道より右側あり 淨土宗中々花洛

知恩院ハ屬を閑山を隨流和尚と号ハ寛永十一年の閑創り

當寺佛元和尚ハ扶宗の志厚く曾て字信録千卷を著ハ刊行

して普く学徒ハ尔を尾州の産也 當寺ハ子安觀世音を安

置も聖觀音中々傳教大師の作あり又同一相殿ハ某師佛

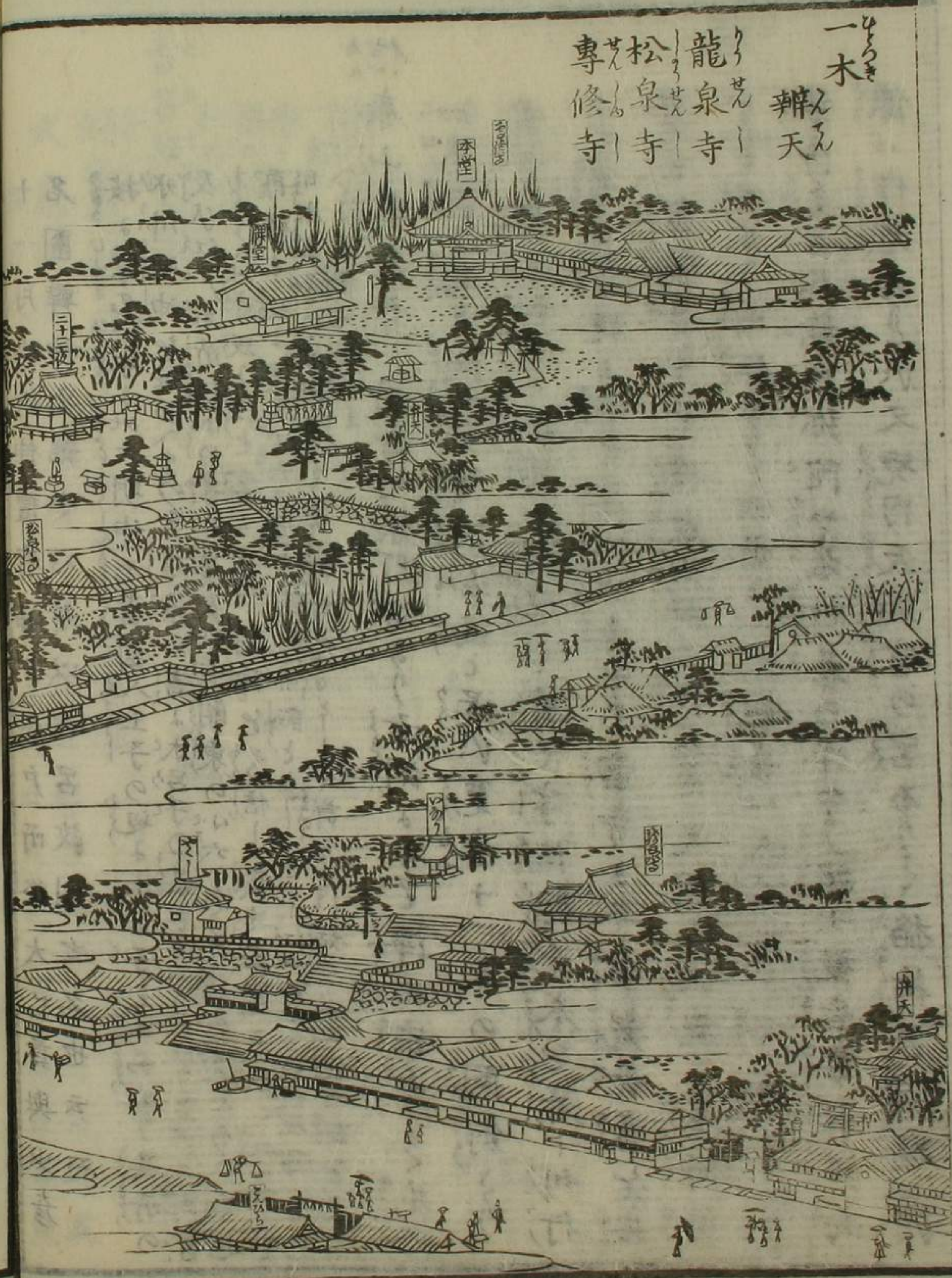
と云安せり同作ありと云世ハ一本觀音一本某師と号本立

像ハ作者も又境内天満宮の宮あり 稻荷を相殿と云

像ハ作者も又境内天満宮の宮あり 稻荷を相殿と云



一木 辨天  
龍泉寺  
松泉寺  
專修寺



天満神の神像ハ東叡山慈眼大師作らせらるゝ所なりや  
云傳ふ

平河山浄土寺

源照院と号け同所龍泉寺より半町程南の方

同一側あり浄土宗中々縁山ノ属を本寺阿弥陀如来ハ座像

四尺餘作者詳かハ閑山ハ教譽聖公上人と号中興を源蓮

社本譽利覚一故と号けり當寺昔ハ河城内平河口の辺ハ

ありと元龜三年今の地ニ移されりと云

一行山專修寺 同所寺町あり當寺も縁山ノ属を所の浄刹

中々本寺阿弥陀如来ハ惠心僧都の作丈三尺閑山ハ寂蓮社

曇譽上人と号け昔ハ青山ノありと勢至菩薩と安せ草堂

なりと永祿年間閑山上人一字梵宇と其後亦坂水川

明神の辺ニ移ると又寛永ニ至ると同寺町ニ地をぬらと遂ニ

元祿ニ至ると今の地ニ移ると寺ニ存せり金銅中々甚古佛なり



一本原 今赤坂傳馬町の裏通僅一本町の名と残せり昔此辺

なつて一木原といひ矢盛莊七郷の中やく古き名ありと云

上下とニツよる河上一本谷敷橋の辺といひ今四谷々々を境に

王寺といひ薬師家の霊場あり昔境内に大木の榎あり是れ一本と云

又下一本此赤坂中河所清岸寺中薬師ありと云王寺の霊像と云

印と云共一本薬師の標ありむす此寺も大木の榎ありと云

上杉朝興と打勝敵の首とも實檢一本原は嶺打揚作法のやく

勝岡を執りたる一木原と云

北条家の所領後帳大田大膳亮所領の

批町ありと云れ批町の辺一本の内なりと云或人云此地町屋ありハ

天正十九年の頃なり

狩野興意墓 同所三分坂下靈鳳山種徳寺の境内あり當寺を

大徳寺派の禪園やく昔ハ相州小田原ありと云天正十九年

批町より引き後又當所に移る岡山ハ東光知灯禪師と号し

医王水も當寺の靈泉なり

今井古城址 氷川明神の西北の方松平藝州侯の中居き

地と云今井四郎兼平の城址ありと云紫の一本と云

草紙ハ齊藤別當實盛の城と云或ハ田子先生義賢の山城あり

と云い傳ふれとも共詳なり

北条家の所領後帳大田新六郎渡辺

氏家系宮内少輔勝行北条家より此地を所領し加又牛込

赤根山 紀州公彦中居の地といふ昔ハ此地ハ多く茜を産せ

故ハ茜山といひ今ハ紀伊國坂と呼ぶ地昔ハ赤坂と稱へ

となり赤根山の坂ありハかく赤坂とを号けり云

圓通寺舊跡 同所寺町あり此地申の方より寅の方へ向ひ

下坂と圓通寺坂と云此故なり今此地ハ佛智山圓通寺

と云目蓮宗の寺ありとも古の圓通寺ハ異なり往古廢

せ圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といふ沙門建立する所と云銘ハ

深草元政法師の撰する所あり其鐘今ハ亡びくをいへとも古きを

存せんう草山集小冊と以て之を記し其旧跡を失ハと云



寺徳種





赤

武按州圓通寺鐘銘  
大集經菩薩應類鑄  
法象慈而為一應切悲願  
通之舉其意在茲精化主  
修二獸弁之句勒為持之  
圓戲法余以曰諸佛擊  
似諸世間如幻師如螺  
此遊又遊戲翰墨為佛  
銘遊諸世間如幻師如螺

鼠山流光人未驚  
虎狼野千氣縱橫  
龍宮高處擊華鯨  
馬腹忽變聖胎成  
夜霜降月舍清城  
狗不吠王舍城  
猪雞羊蛇兎牛  
觸人未唱轉  
金山轉  
觸人未唱轉  
金山轉

崑崙山玉窓寺 同所右側青山家の邸弟の間はあを禪宗中

閑山ハ普光禪師閑基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉より故小  
寺号とせ本寺を觀世音の像ハ中將姫香を以て是を製する所と

幸成の寺ハ道北あり玉窓寺ハ則當寺是より又道より南ありと  
後聳の高木主水正正次地を割く其地ハ天心の頃山口重政の第宅ありし  
家ハ賜ふと唱へ其地の廣りより

百螺山鳳閣密寺真言教院 當寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と

號一諸國咒驗末寺の總綱より本坊ハ和州吉野郡鳥栖山に在て  
開基根本理源大師諱を聖寶僧正と號を光仁天皇乃皇子  
葛聲王の令子あり弘法大師の肉弟真雅僧正小投して剃度し  
螢雪の功年を積南都の諸名公に叅して法相三論華嚴唯識と  
學ひ慧業日々小進を給ひ一萬乘の聖主一時の公卿尊師  
の徳を仰慕し一と淺くは時小宇多天皇寛平元年己酉  
尊師年五十八大和國金峯山ニ毒龍栖あり霖雨洪水五穀  
登らば山中修歷の徒もこれに廢絶をなすに於て天皇宸襟  
を惱し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉り



金峯に分入る法威を震ふて龍を伏し、抖擻修行の道を再興し、次て奏聞を経て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり。即尊師の上足貞崇僧正を以て第一世とし、昌泰三年始て此處に於て峯受灌頂の密法を興行し、爾來七百餘年を経て元禄年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總綱の役寺也。神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して天下泰平國家利民の御祈願所とし、毎年の四月八日七月十九日少順逆二峰の神事柴燈護摩の儀式あり。此日諸人群衆に當寺本尊不動明王の靈驗の尊像にして里人出世不動尊と稱して常小詣人あり。脇壇に神變菩薩理源大師の像と安置を寺内に三峯權現稻荷の小祠あり。境内に櫻樹有暮春の頃清賞あり。此樹ハ當寺の一代俊賢僧都葛城山より種と取りて之と昌平坂の舊地に殖て高間櫻と名つけたる名木あり。寛政年中聖堂御造營の節替地を賜ひて當寺に

今の處に移され刻舊樹ハ枯て僅に蘗生乃若木と存し高間櫻の名を遺せり。當寺の西隣ハ即梅窓院あり。

長青山梅窓院 寶樹寺と号を青山久保町道より左側あり

浄土宗中々京師知恩院は屬也。當寺ハ青山家累世本尊阿彌陀

如來の像ハ聖德太子の作あり。當寺ハ寛永年間戴蓮社頂譽

冠中南龍和尚開基し觀智國師と請し、開山祖也。國師ハ

中興開山、愍門の額長青山の三大字ハ黄檗悦山の筆なり。

泰平觀世音 自然銅文三寸三寸の千手大悲の靈像あり。天竺佛と稱し、

聖武帝ハ献り南都大佛殿の傍あり。源頼義公兄弟奥州追討の頃此靈

像を奉持し陣中守護とす。凱陣の時奥州伊達郡小安置あり。故あり。青

山家ハ傳り後又當寺に奉持す。羅漢堂 十六阿羅漢の釋尊左右ハ

菩薩の像と安置す。鯨鐘 樓ハ掲げ宝永七年十一月當寺第八世法蓮社壽

夢中ハ告く云く我今畜身を解脱せん。一面の鏡を携來し、師願ハく

是と如く云く我今畜身を解脱せん。一面の鏡を携來し、師願ハく

是と如く云く我今畜身を解脱せん。一面の鏡を携來し、師願ハく

是と如く云く我今畜身を解脱せん。一面の鏡を携來し、師願ハく



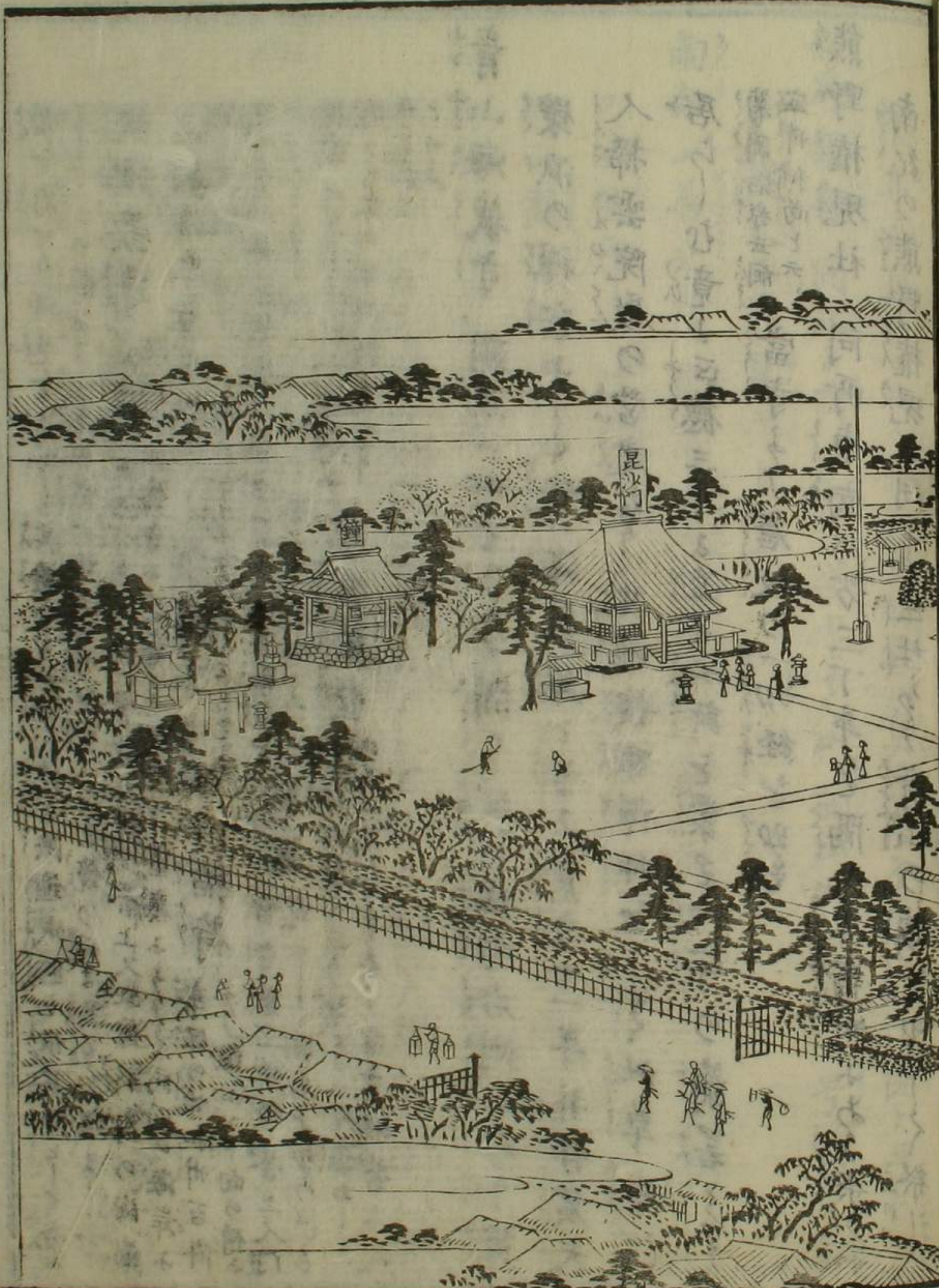


堂音觀平泰

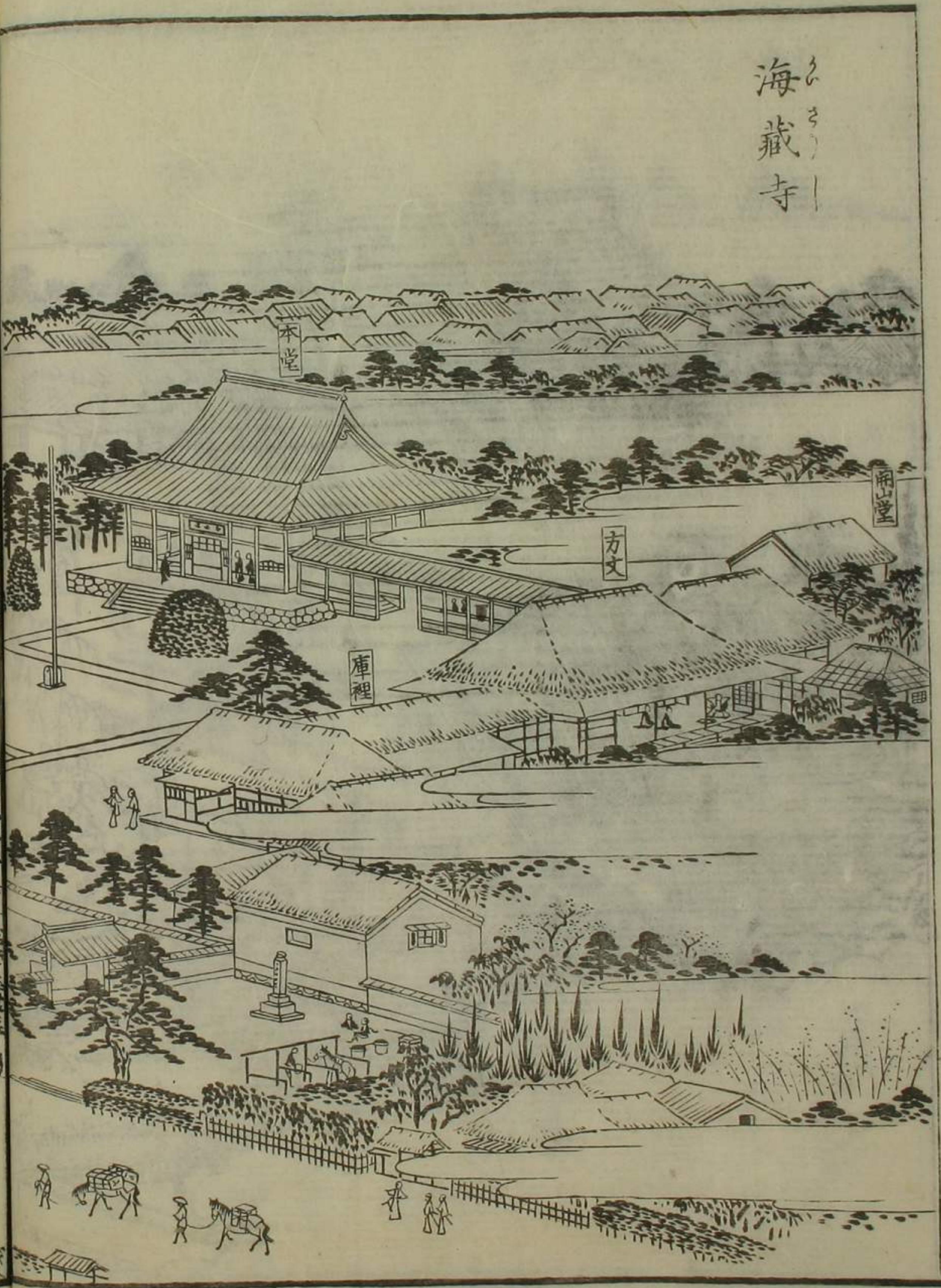
本堂







海藏寺





鏡を存せり師是と奇と其鐘を如く終に洪鐘成就を依其證として夢ふ  
てその龍女は宝光祐龍大姉と法号と授へらるる鏡の面は其号と鑄まじり  
楔地蔵尊 慈覺大師の作ありとの當寺に世順上人北德行徳の海岸  
湊村の法傳寺のませし頃中靈應ふより同所の海岸の  
しと感得あり海岸楔あり本寺得たり 百濟稻荷 事保の始和州百濟  
然し其楔と駁ひし則此本寺あり故に名を 拾櫻 當寺前二世峰上人門  
記し此梅窓精舎は鎮座ありて永く衆生を 塔の奥ふあり本寺の座像ありて  
度せんとなり依りて今堂前不 虚空藏堂 尺二尺ありてあり當寺順上人  
親裁りて依りて今堂前不 虚空藏堂 尺二尺ありてあり當寺順上人  
存せり所の垂枝櫻是なり 作られ

青山海蔵寺 同所一町を隔て乾の横町右側あり黄

檠派の禪宗中始に海蔵庵と号す寛文十一年井伊侯夫

人掃雲院殿の營建なり其頃錢眼禪師を以て此草庵に

居らむ竟に正徳三年に至り公許を蒙り一字の蘭若とす

菊岡沾涼云岡山 當寺より唐板の一切経を如く

熊野権現社 同所東南の方三丁を隔て原宿町ふあり祭る所  
南紀の熊野権現は同く三社あり青山の鎮守や祭礼ハ

隔年九月廿一日は修形を別當ハ真言宗中浄性院と号す

心見觀音 同北に隣り天台宗中竹園山教學院と号す本寺ハ

聖徳太子の真作といふ

南命山善光寺 同所百人町右側あり信州善光寺本願上人

の宿院中浄土宗尼寺あり本尊阿弥陀如来ハ長一尺五寸

股士觀音勢至の二菩薩ハ共一尺二寸あり稱徳天皇の景雲

元年八月十五夜法如尼和州當麻の紫雲庵中念佛誦持の

頃信州善光寺の如来來現ありと拜し其の直は一刀三禮

中し其の形を摸する是則當寺の本寺あり

當寺ハ永祿元年戊午の創建あり始に谷中ふありと中興

光蓮社心誓知善上人明觀大和尚の時宝永二年

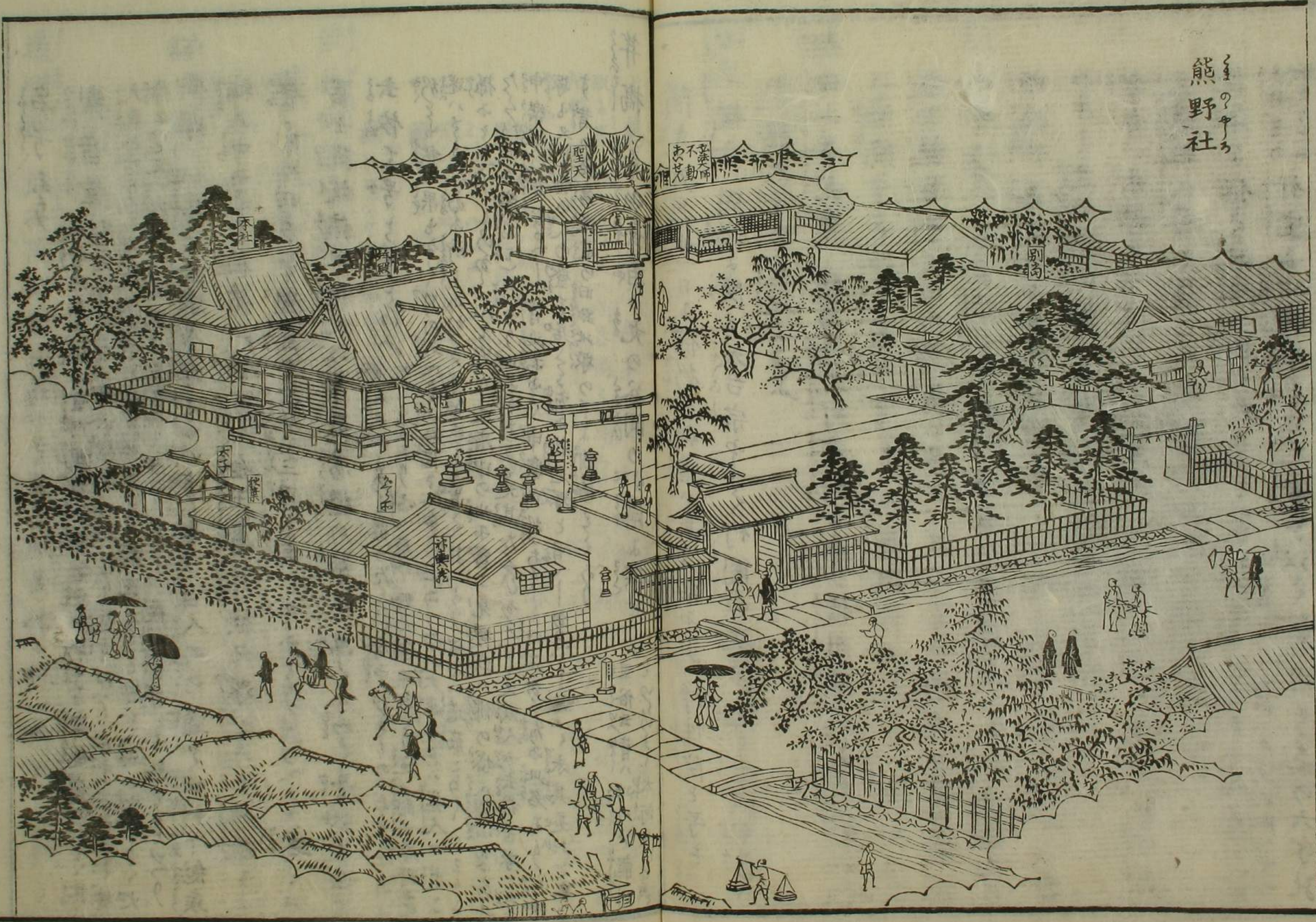
台命に依りて此地へ遷されりとあり

玉林寺の什宝に中將姫自の毛髮を以て製造する所の六字此

地ありと云



熊野社





名号あり

観音堂

本堂の左小並に堂内観音百尊と安んずるに聖観音なり其丈二尺七寸あり恵心僧都の作なり當寺むら谷中にある一火災の火災の時自ら火中を遁れ出たなり靈像なりと云故小字一火除と云又火災の時自ら火中を遁れ出たなり靈像なりと云故小字一火

斥

候塚 一名を去我苦塚とも云あり百人町の通田村下総侯邸の中ありを相傳ふ淡谷の金王磨斥候の塚なりと此塚より

登まき四方を顧望せれば二三里の間ハ手小とり川へく遠くハ

富士筑波信甲相武の青嶽房徳の翠壺画くらめく憂悲苦惱を

去依て号とすとのみ 或人云此の塚のたけひ府中むさしのありあり

仍も秋の果もかく月の入へき山の隈へあき各め大源あり旅人の道よ 迷はさるゝ人なる所なるか塚を築き置きて其上より望め大源あり旅人の道よ 梯ふさるゝ人なる所なるか塚を築き置きて其上より望め大源あり旅人の道よ 申樂塚の誤なり昔此の地あり又其たひあり又或人云去我苦塚と云ハ 塚も又見物の人の登居る所なり物見塚と唱へありと云未其是非と云

筭橋

青山長者丸の谷間の小溝に架せり 里谷云昔ハ此川を龍川と云

或鶴ヶ谷よ作と鉤匙とす 菊岡占涼云古六孫王孫基保乃の筭と此 故は筭橋といひ又八怪基橋とも号するといひも憶記なりと云 左之と訓を髮撥といひ可あらん其余髮撥は因むの諸説ハ繁きをいひ

撥ハ筭橋ハ國府ハ谷橋あり世ハ長祿年間ハ江戸の田園と稱するものハ 龍崎の辺ハ國府方といふ地名あり永祿二年北条家の所領後懐も森三郎 といふ人の江戸の所領の内ハ國府方といふ名を注し加こり是等と合せ 考ふるハ此ハ昔國府方と稱せし地中其谷合ハ架せし橋なるれを 國府ハ谷橋と唱へありと云ハ通音あり俗ハ市谷越谷鳩ヶ谷と

淡

谷長者墳墓 同所松前家の弟宅の地ハあり小高を塚中

頂小松樹繁茂を相傳ふ應安の頃迄此地ハ富農あり是を淡谷 長者と稱せしと云 今同所百人町の南に長者丸と唱ふも其宅地の旧跡 なられといひしと云其長者子孫近き頃まで出なる

百姓

接ハ江戸砂子ハ淡谷百姓町岡部家の別荘の地ハそのと富民慶福といひ 其の宅地ありと云又青山恩田の松平藝州侯の別荘ハ稻荷の叢祠ありと 其前ハ古き石の燈籠あり其棟石ハ康曆二年十月日願主四郎大夫とあり 是を淡谷長者建立のものと云物ハ四郎大夫慶福と稱せしと云やされと其姓氏 是もあはるゝ江戸砂子ハ淡谷長者の名ハ宗順といひたりと云

通明觀

淡谷岡部家別荘の号なり 風景他ハ越四時共ハ美觀なり





青山  
善光寺



竹橋



土氏云此地ハ往古波谷重國旧館の跡と云ハ又ハ富民慶福といひ

しめ住跡なりといふ

普陀山長谷寺 同所ハあり曹洞派の禪窟なり江戶檀林の一室

なり野州富田の大中寺ハ属を本寺十一面観音の像ハ和州長谷

寺の観音の摸形なり立像二丈六尺あり佛首の中ハ法丈四寸ハ

十一面観音の靈像を安置せ則和州長谷寺の本寺と同木の樟小

しく同作ありといふ関山ハ門庵宗南和尚より當寺昔を赤坂

溜池の上ハあり龍雲院といひて天正十二年甲申此地より

移し寺号をも改むるといふ或人云當寺昔ハ山口氏重政の禪窟なり

号と寺号と一山の家ノ香花院なりと云ふなりこれと

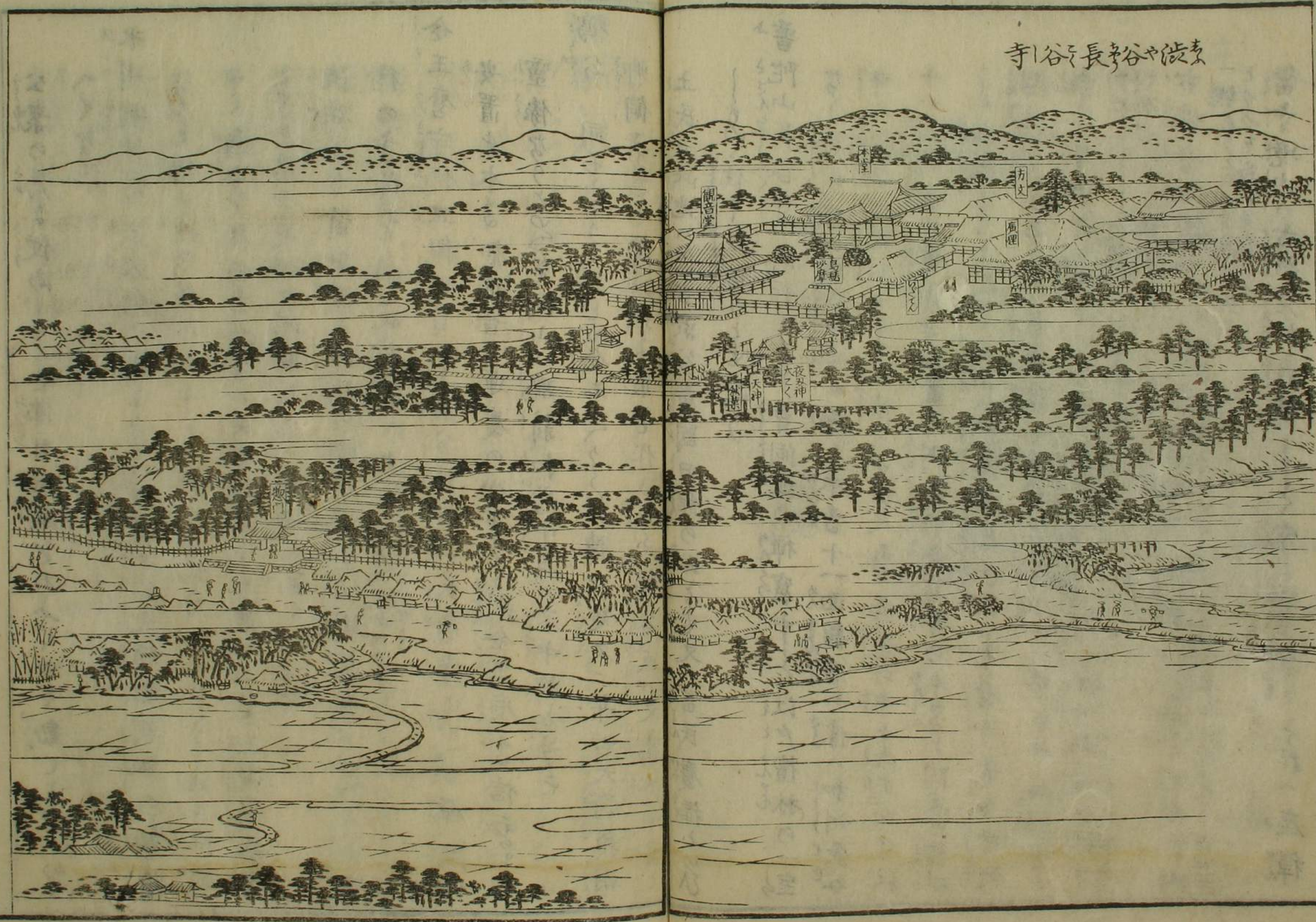
古佛倉 地ノ由ハ舊見内蔵助秀治といふ人當寺へ納めしと云ふ

一縣ありと云ふ世ハ波谷長者

當寺境内ハ古杉老松蒼鬱と云ふ常ニ寂々寥々これハ座禪



寺谷長谷中波





公業の爲は便ありくも佛目祖風をわくくやを勤てよろしく  
へくなん

氷川明神社 淡谷川の端あり相傳ふ右大将頼朝卿の勸清

なりと則此地の産土神やしく祭礼ハ九月廿九日なり此日社前

やく角力を與ゆを別當ハ天台宗やしく惠日山茶王院宝泉寺

と号を慈覺大師の開基なるハ藥師やまの作者詳

淡谷川寺前を流る此北の端は源秀山室泉寺とゆる真言

律の寺院あり閑寂玄隱の地なり道項法如比立

金王磨守佛正觀世音 上淡谷慈雲山長泉寺とゆる禪院に

安置を本多觀世音ハ運慶の作中々則金王磨多信あり

靈像なりとゆる閑山ハ瑞翁和尚中興ハ不中のと号を

鶴谷 同所ありとゆる今あらくゆる傳云建久二年右大将頼朝

卿飼ふ所の鶴此地は兼を作らぬ鶴谷或ハ又鶴澤とも云と

なり羽澤といゆる同所ありとゆる羽澤ハ花洛妙心寺派の禪宗

朝霧ヶ滝 是も同所ありとゆる未だ地を去る里誘ふ

肯此地は淡谷宗順とゆる富民あり女を撫子姫とゆる容貌

衆は勝たり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んとゆる父母其

女を誘引く彼寺は往々ゆる朝霧といふ可髪ありゆる姫を

意慕し竟は思を遂とゆる恨と此滝の下は身を沈とゆる

其傍は小き岡あり願山といゆる其塚ありと云又東の傍は

圓證寺の跡あり

淡谷八幡宮 同所中淡谷あり此所の産土神とを祭礼を八月

十五日なり

本社祭神 應神天皇一座社記云此神像ハ上古弘法大師豊前國

山城國鞍馬寺安置しと淡谷次郎高重護持しと當社の神懸と

ありと云本地佛阿彌陀如来の像ハ慈覺大師の作あり圓證阿闍梨

東福寺創建の時彼脚の僧来りて授与せしとあり





氷川明神社  
氷川明神社



矢拾觀世音

社前よりありて、金王磨を信の靈像  
敵の引矢を多く拾ひあめり味方の陣中へ  
入りてより、義朝誕生の時龍宮より出現し又頼朝尾張國幡屋小宮出現の  
生の時守護し、佛舎念珠とくくを世俗是と安産守護の念珠と  
唱へ大よ

金王櫻

谷の館に植せられ、金王丸の俗名は後此地に移し氏神八幡宮の  
瑞籬ふくむとあり或社記に云文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の  
項當社に詣りて大刀一振を扱ひ又金王丸の影堂に立寄り其誠忠と感  
あひ鎌倉龜ヶ谷あり櫻一株を栽りて金王櫻と号せり又此櫻の  
一本と記する冊子に紀州亞相頼宣卿の御母堂養珠院殿此櫻の實と成る植せ  
らばや生立ち、統も閑人とせし頼朝の社にありける元本の櫻既に枯  
れ家臣流谷善入といへり人、金王丸の遺裔あり、他の人の植  
養ゆもあり、作の實生の藤と善入下りあり善入  
恭しく是を拜受し其枯樹の跡に直進する今の櫻是なりとあり  
あり大永四年五月三日北条氏綱と頼朝與高輪の原で合戦の時氏綱の後陣大道寺八郎  
小松とありて淡谷攻入放火其餘煙當社に及り此時神跡此松樹の上へ  
故に此名ありとあり社地は三十六株の神木あり、今ハ僅小古松五六株社  
地の辺に存せり

什寶月輪御旗一流

社記に云く後一條帝の長元元年五月平忠常北總  
前願として扶父の峯は八流の旗を執り、其内日月の二流ハ武基に給り大宮の  
仙北金澤城を攻落せり依て義家朝臣基家を召れ此軍勝利あり、  
立寄らせし月輪の御旗を、寛治六年正月義家朝臣凱陣の時谷盛庄へ  
者ありて、置りて崇ありとあり能證阿闍梨深く社檀小む置り  
諸人小拜せり、阿闍梨の時節

兜建觀世音

社記云源義家公陣中奉持の靈佛なり、後年基家小  
御子丸太刀、河崎土佐守仙北金澤中、猛威を振ひ城を攻破

獅子丸太刀

河崎土佐守仙北金澤中、猛威を振ひ城を攻破

毒蛇長り

金王丸長田々館野間の内海わき勢ひと

六孫王經基髮搔

經基より推守興世は給ふと義家朝臣

社記曰當社ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文ウ曾孫

秩父別當武基の一子小同十郎武綱とつる英雄あり寛治  
三年六月清原武衡同家衡々猛威を摧き奥羽の間勢を  
揮ひ名譽を天下に輝く故に將軍義家朝臣是を感し  
勸賞としく其子六郎基家、河崎土佐守と小武蔵國谷盛莊を  
給ふ、赤坂代々木麻布、飯倉一ツ木、今井等是なりと云、依基家勝

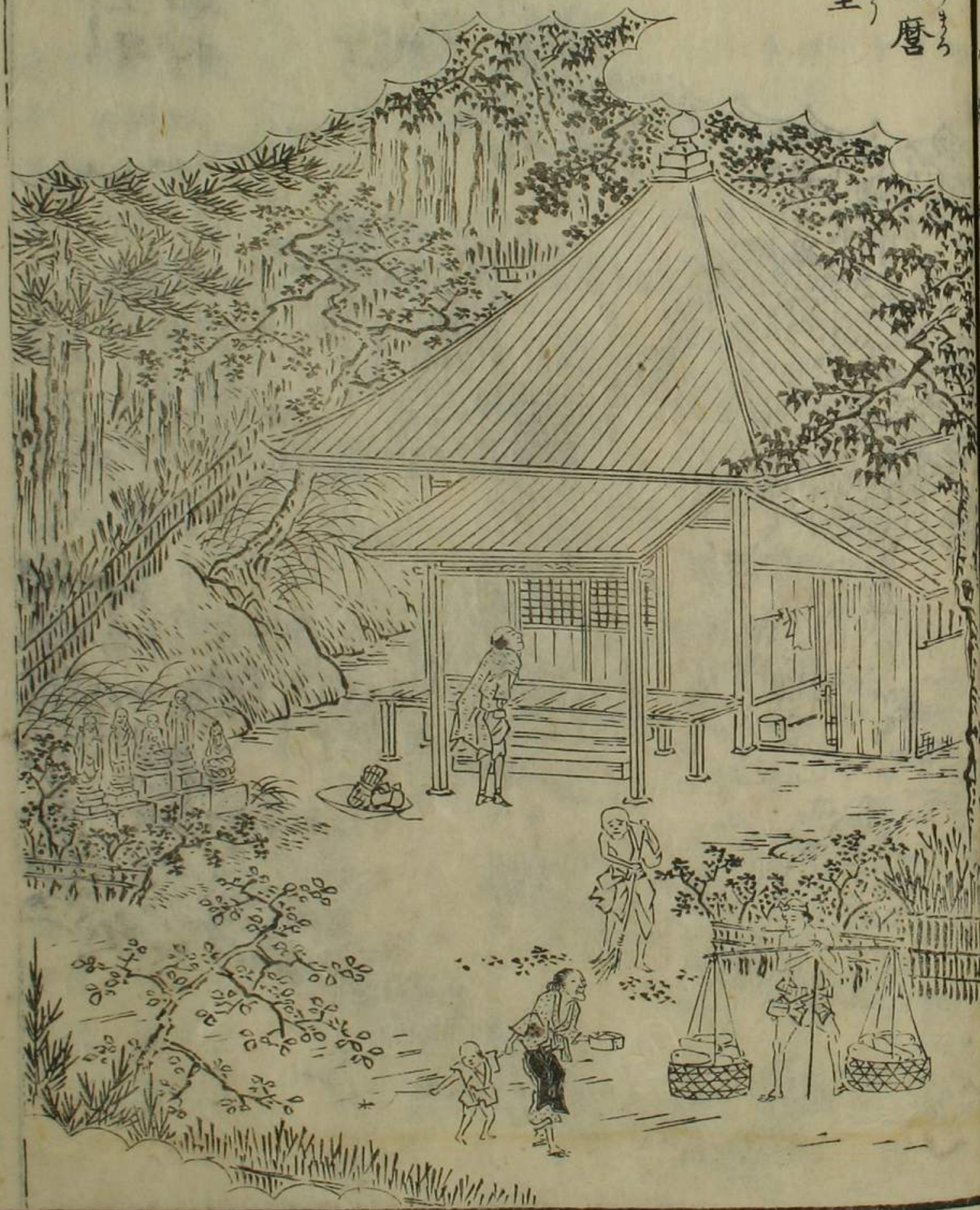


金王八幡社





金王磨  
影堂



地を擇ひ同六年正月始末邑の地小當社を營建金王磨近代氏神と稱し重嚴なりと云別當天台宗中々淡谷山東福寺と号に相傳小六孫王徑基の開創にして昔ハ親王院と呼しあり閑山ハ圓鎮僧正と号す養和元年百十一歳中々化寂ありと云

金王磨影堂 同所向小側叢林の中ハあり八幡宮社記云く

金王磨十七歳の時主君義朝の命により鎌倉より赴く項其母別と惜之悲歎の涙沈む依金王磨自ら姿を造りて母

堂の許小残しとめらると云云  
其像ハ鐵衣ニカケテ  
 帶ニ容納ナリ  
 按ハ金王磨祖先ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文ハ曾孫義朝別當  
 武基の子同十郎武岡其子と六郎基家と云此時小至と始淡谷を以て  
 氏とす同く一子重家河崎平三ハ天後後五位下小任土佐守と云爾ハ  
 當社ハ幡宮ニ祈請し其後永治元年一手と云八月十五日ハ金剛夜叉明  
 王の化身と云一説ハ金王磨ハ庄司重國の子ありと云時代違ハ似たり保元  
 物語と云く考へし金王磨ハ左馬頭源義朝ハ任童中々度ハ似たり保元



金王磨  
産湯水



起一待賢門の軍小打員尾張國野間の内海小あをいし家人長田庄司忠宗の  
 とく小落伸まひと長田心まひと浴室小義朝と紙作の金王磨らち  
 とく小あひ走とひりひり入者せとさうあせく平後都小登と義朝の妾常盤  
 猪園と修り其ありあをさうさうと後義朝の跡とさうひまわせんあそそく  
 重家寛治六年淡谷の姓とありとあり金王丸より淡谷と唱あを縁起を  
 子重國其子高重其子金王丸とあり社記やを重家の子あきとさう八幡宮  
 折と後お金王丸とあり高重八金王丸より後や文治年中頼朝時代の人  
 ありとと

金王磨産湯水

同所一町をわき西の方堀の内とりのあり

誕生池とも号く八幡宮の社記一度此靈泉は觸る者ハ  
 於千歳を保つと云傳ふとあり此辺を淡谷氏居館の地  
 やと土人城跡と称す馬場の形築地の跡あり存せり古井  
 うかこあり

東鑑 治承四年庚子八月二十六日入夜定細盛細  
 高細 等出宮根深山之慶行逢醍醐禪師全成相伴  
 之到于重國淡谷膳館重國乍喜憚世上之聽招于  
 庫倉之内密々羞膳勸下畧喜憚世上之聽招于  
 書養和元八年二月十七日淡谷庄司重國次男  
 同 高重竭無貳忠節之上依令感心操之隱便給知行



滋谷下郷所濟乃貢等所被免除也云云

河崎庄司次郎高重宅舊趾 同堀の内あり土俗傳へ云此重國ハ  
違論のりあり六郷の河崎へ引移をも其頃此地ふあり  
山王の社とと彼地へ引くも其田地は稻荷の叢祠を残り  
留めり

姉尾平次左衛門光景旧館地 是も同所あり今も光景馬を冷  
たりとつる小池あり早魃ゆと涸るもあく霖雨ゆも溢るも  
常は岩間ととりぬ清冷と傍は駒繫榎と称する  
あり光景愛せ安達粟毛とつひ駿足と繋き水と飼ひ  
しとあり

甘露水 同所ふあり里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地ハ  
旅宿あり頃此水を搦く味美ゆ甘露の如くありと褒詞  
ありしとあり名とせりとそ

玉池 同所あり里人云く天文の頃天下大旱魃一河水ハ  
流と絶一池沼ハ平地ハ異あり時此水涌出するも常に  
倍せり此里は住一女子水を掬んとて水器の中ハ鞠の如ク  
一顆の宝珠を得り玉精其女子ハ託し云く是ハ八幡  
宮の神器なり大永の兵火とさけ此井中ゆあり直ハ神祠ハ  
収むへとあり依里氏大ハ恐れ謹く是を神祠ハ収むるとそ  
此宝珠今滋谷 八幡宮ハ収むと云 此故ハ玉の井とも唱へりしとあり

神仙水 八幡の西ハあり相傳へ往古空鉢仙人此谷ハ入く不老  
長生の仙丹を煉り一靈泉なり故ハ神仙谷とも云とあり  
鉢山とのや法道仙人の鉢此ハ自ら飛來る故ハ号とも  
とあり

富士見坂 滋谷宮益町より西へ向ひく下る坂と云鉢ハ芙蓉の  
峯ハ對ハ名とそ相模街道の立場中茶店酒亭





富士見坂一木本松



あり麓の小川は架せる橋をも富士見橋と名つけしを相州街道の  
中坂の敷

四十八ありとあり此富士  
見坂其首ありとあり

道

玄坂 富士見坂の下耕地を隔て向ふ方西へ登る坂をいふ

此坂を登りて三丁程あり此路あり直路ハ大山道中より三間茶屋あり登戸の  
渡りて二子の渡へ通す右へ仍ハ駒野の所用を宿の前通す北澤淡島への登り

世田ヶ谷へ仍道あり道元作 里諺云大和田氏道玄ハ和田  
義盛ウ一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡其残黨

此所の窟中小隠れ住て山賊を業とを故小道玄坂といふをかり

東鑑廿一云 建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左  
右衛門尉義盛率三衛門黨忽襲將軍幕下謂伴與力衆

者嫡男和田新左衛門三郎義盛同子息新兵衛尉朝  
盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和四郎左衛門朝

門尉義直五男同七郎義重六男同八郎義清  
衛尉義信七男同八郎義重九男同十郎義清

古郡左衛門尉義直保忠肥次郎義重  
重政同尉義直保忠肥次郎義重

左衛門尉義直保忠肥次郎義重  
三郎義盛同七郎義重

景家大田五郎義直保忠肥次郎義重  
下家大田五郎義直保忠肥次郎義重

盛重被討取父義盛年六十七殊歎息於今者左衛門尉  
益云揚聲悲哭迷惑東西遂被討于江戶左衛門尉

能範所從七郎秀盛等以張本七人共伏誅朝夷  
尉義信八郎秀盛等以張本七人共伏誅朝夷

名三郎義秀三十八並數率等出海濱船赴安房國其  
勢五百騎義秀三十八並數率等以張本七人共伏誅朝夷

先次郎左衛門尉和田新兵衛余一左衛門尉常盛四十一山内  
郡左衛門尉和田新兵衛余一左衛門尉常盛四十一山内

戦場逐電云 治和四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大和和三郎義久子息義成  
和太田義盛同次郎義茂中畧三浦と出く泰向とあり或人云道玄と

道玄物見松 道玄坂を登りて七町あり西の方同一街道大坂  
と云あり此方右側あり一が明和の頃枯りてハ伐る

と云 本の圍五と程あり根あり三丈とあり上あり東西ハ廿間とあり南  
北ハ十六七間とあり是は枝なり今駒場坂の下用水堀の傍ハ一株の古松あり

混下道玄と稱されし一本松と稱し此の松と別  
里諺云道玄此松樹を登りて往來の人を見下し小賊は命

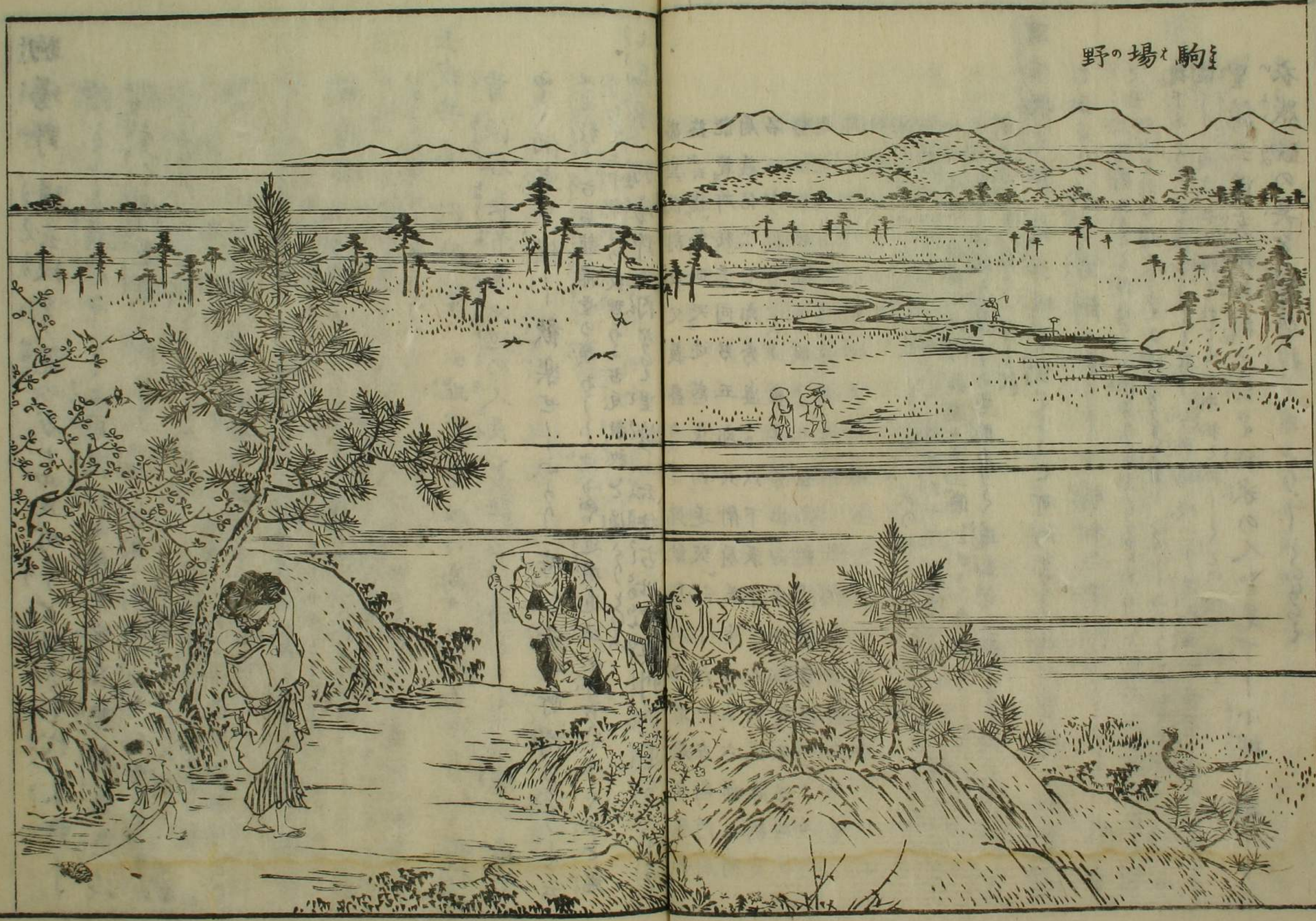
衣服物の具を奪ひ採りてとあり

衣服物の具を奪ひ採りてとあり

衣服物の具を奪ひ採りてとあり



野の場と駒





駒場野道玄坂より乾の方十四五町と隔ると代々本野

類多く御遊獵の地なり

北条家の臣加藤丹後守とて人の後裔なり又此地の里正如藤氏某も小田原

蛇池 官林の中よりありと云享保三年此地御遊獵の地小定とせられ

鐘鑄塚 駒場野の中よりありと云方九尺高七尺八寸なりと云此の寺の

去我苦塚 別所墓と云地ありと云塚の高サ一丈ありと云相傳ひ

昔淡谷長者某此辺の人民を語りし時とて此塚の邊に

ゆく酒宴を催し歡樂せしふより苦を去の所謂なりと云

源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至り酒宴あり

土器塚 駒場野の内なる里諺云往古此地奥州街道なり

足毛塚 宿山と小地名小称る地の里正金子氏構の内より頼朝卿

永川明神祠 駒場野官林あり此方の岡より祭神素盞鳴

命一座天正年間甲州郡内上の原とて地ありと云加藤

氏 加藤氏の先此地に移り住む頃産土神なりと云小

此神を勧請なりと云とて祭礼ハ毎歳九月廿九日執行

天満宮 同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方より相傳ひ

往古ハ馬をとりて埋り

乘せり所の芦毛馬の斃れとて埋蔵せしと云

按此地は芦毛塚と称せしものあり

此神の氏子ハ古より疫災の

患と云ふ

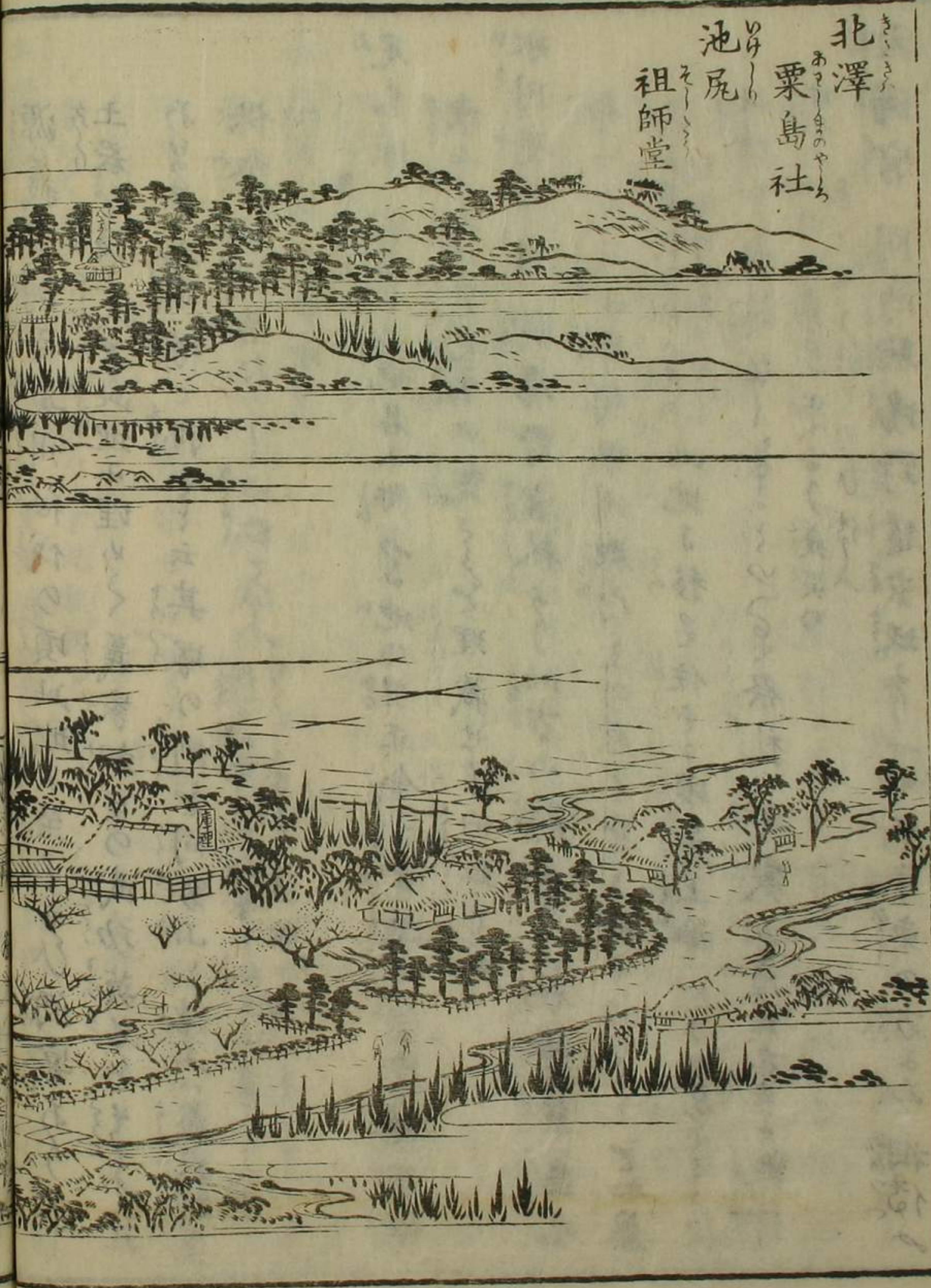
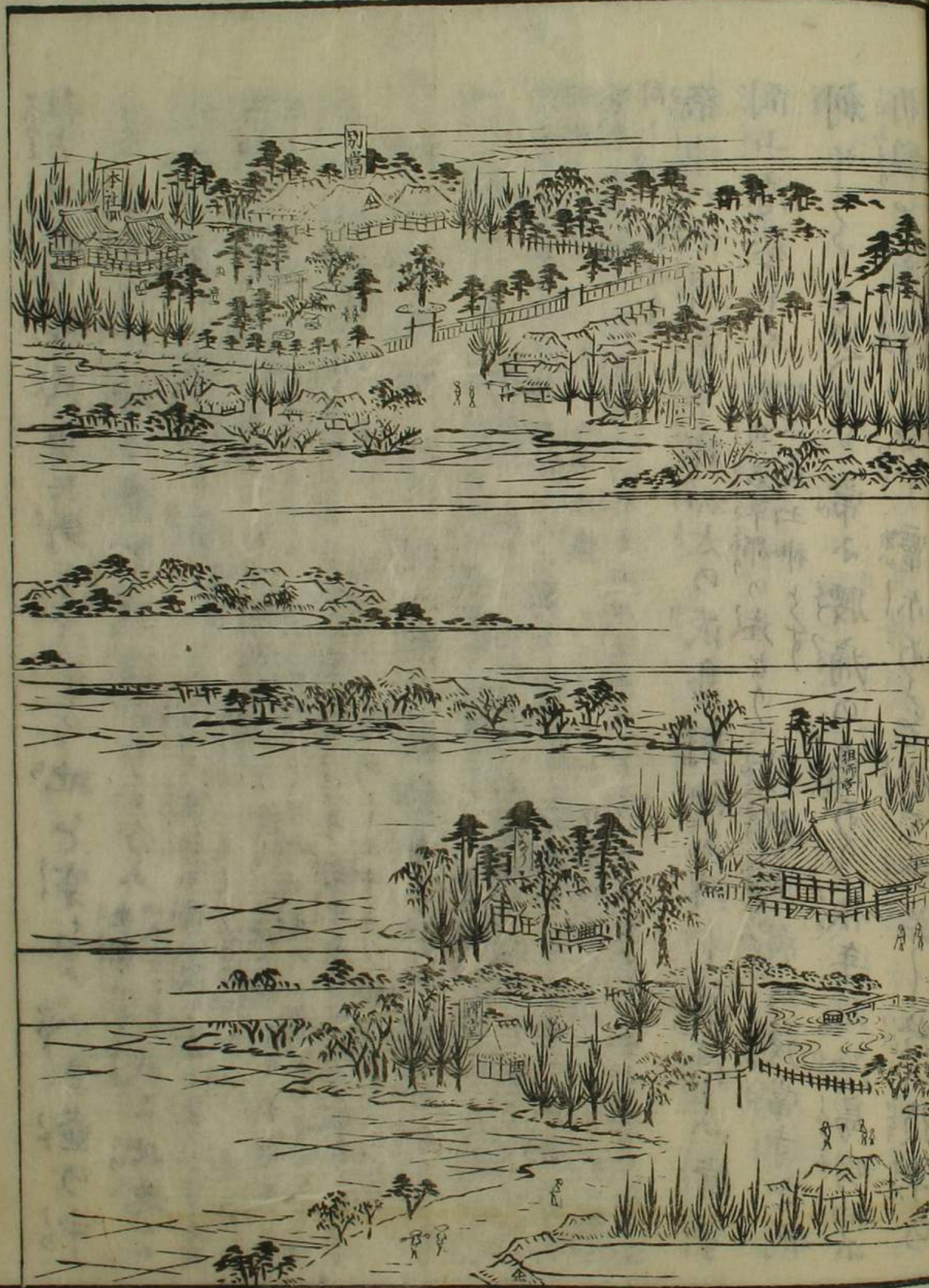
此神の氏子ハ古より疫災の

患と云ふ

患と云ふ

患と云ふ





北澤  
栗島社  
池尻  
祖師堂



往古此地の農氏市兵衛との地の地を穿ちて小き壺の中より印子の菅神の像と感得せりとのみ昔の菅神の像ハ賊の盗み奪はれし故に此地より宮居と宮守を鎮守と崇むると云菅神の像を宮中安置を往古神跡を堀穿ちて今中川侯の山中尺の神は入と云石劔同社地稻荷の祠は長二尺二寸斗圍本より八九寸廻りあり

北澤淡島明神社 北澤村八幡山森巖寺との浄土宗の寺院は勸請す當寺ハ此地ハ幡宮の別當なり又森巖寺

祭神ハ紀州名草郡加太の淡島明神同ハ西と稱せり同相傳ハ當寺同ハ西と稱せり同相傳ハ當寺同ハ西と稱せり同相傳ハ當寺同ハ西と稱せり

病病を道れたりハ其報賽と云紀州加田淡島明神の神主小告く此御神と此地ハ勸請なり法樂ありと云此故ハ累世の住僧連綿と云此灸治の法を口授相傳ハ衆病悉除の爲毎月三八の日は是を施せり依灸治を求むる輩遠きを厭はせり此地ハ至る者少くハ祭礼ハ三月十九日と云除劔難日蓮大士堂 同所ハ町斗南の方池尻村二子街道の右側

常光院との日蓮宗の寺ハ安置也此寺ハ日義上人の創基ありて往古ハ碑文谷法華寺の南坊ありと云日蓮大士の本像ハ丈二寸二歩あり相傳ハ文永八年辛未九月十二日相州龍口ハ於く大士殊ハ伏せんとせり時刀尋段ハ壞の奇瑞ありを以終ハ北條時頼の赦免あり誅を道と云同國依智ハ移リ本間六郎左衛門重連ハ家ハ入ル重連大士の化と云大士手刻の自像をありんすと云依自ら此像と彫造あり重連ハ附屬せり後故あり



子明神



當寺は安置せしむるを靈驗照く故小指人常は絶す

正一位子明神社 二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を

隔て丘の上より別當八天台宗宿山村壽福寺より兼帯

馬牽澤舊跡 同所子明神の前今田畑とある地の旧名なりや

今ハ上目黒世田ヶ谷へ跨り都て上中下と三に分れたる

邑名とありり里諺云文治年間頼朝卿奥州征伐の時設谷

八幡宮へ恭篋あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰

んで献せられんと此地を牽れんと小蹟とありり是を

止られんと或云頼朝卿侍狩の時の中や乗りの馬頻に驚き

汗と照合せり又云頼朝卿の御ありひ、芦毛の御ありり今此地を芦毛

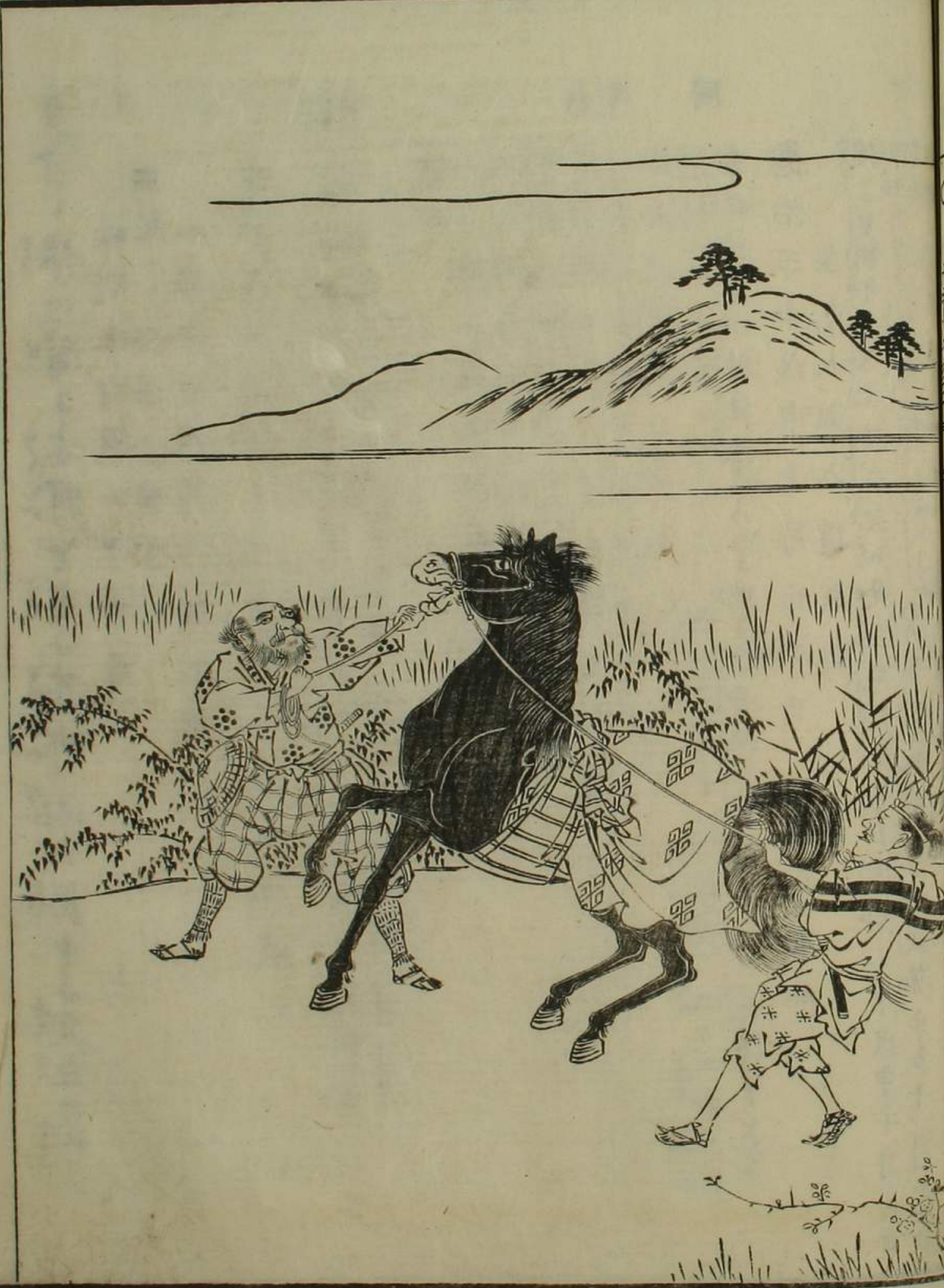
若宮八幡宮 上馬牽澤村二子街道より右の方三丁沖入る小き

森の中あり駒留八幡宮と称せ北條相模守時頼朝臣宗盛の

靈像中々神躰ハ一寸五分あり左の面より弓を持



馬牽澤古事  
うまひきさくしの  
こと









常盤橋 ときもと



徑營落成の日新しん法華經六部ぶくを書寫しやうして銅壺どうぶに収め社の礎下いしに埋藏まいざうし駿州建徳寺せんしゅうけんとくじの僧隆範そうりゅうはんを遷宮せんぐうの式を執行しつぎんせしむるとの

八幡山宗圓禪寺はつぱんざんそうえんぜんじ同所どうじよ二子街道ふたごかいだうの左品川上水ひだりなまがはの上みづの端はたにあり當寺とうじの若宮わかしみ八幡はつぱんの別當べつたう寺じなり洞家どうけの禪院ぜんいんあり江戶駒込えとこまごの大圓だいえん寺じに屬ぞくせ本もと多おほく座像ざざうの釋迦しやくぢや如來にょらいを安置あんちせり當寺とうじハ北條きたじょう左近太郎さこんたろう入道にゅうだう成願じやうげんの開創かいさうあり存應林ぞんおうりん可和尚かおしょう中興ちゆうきやうより北條きたじょう左近太郎さこんたろう入道にゅうだう成願じやうげん靈牌れいはい

文保元丁巳年十月廿三日寂  
當寺開基 心覺宗圓菴主  
北條家孫左近太郎入道成願

長立山常光寺ちやうたつさんじやうかうじ 菘卷村すまきまきむら世田谷上宿せとやの上じゆくの南みなみにあり日蓮宗にっれんそう身延みのぶの末すえ中ちゆう天正十三年てんしやうじゆんさん乙酉いづ八月はつげつ草創くささうせ閑基かんきハ越後人えちごのひと泉藏院いづみざういん日禮にっらいと号なづか日禮にっらい采雲さいうんの頃ころ此地このち青山氏あやまのうぢの家いへにあり此人このひと嗣ついであり



愁ふ日禮妙徑秘咒の奇特をあり一子を生せしむ故ふ

此人宗教を著し日禮は帰依し更に精舎を創立し日禮を

開山祖とし弟子の礼を傲く青山氏後日林と号す

本尊釋迦如来額ハ如松の二字中一々廣澤の筆なり石水

盤ハ喜多見家寄附也又淺野内匠頭長矩の寄附の

三方あり黒澤を以て室の寄附なり

常盤橋 二子街道中馬牽澤村世田谷入口三軒茶屋の往還

角のあり向へ三丁斗入る小溝小渡を石橋を名はく

里諺云く昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人不美のより

ありく此所小害せし然も其靈里人小崇を依其霊と并天小

崇め其腹小出生の男を若宮八幡と崇めるといふ何事をも

上馬牽澤村あり此常盤といへる女ハ大平出羽守の女あり

よ一 世田谷私記云く

按は此寺より二十歩東の方道より北側は松を植ふる塚あり是を常盤の墓と云ふ不動の石像あり又同一南の方を塚あり是なりといふとどう実なり

大溪山豪徳禪寺 常盤橋より五丁計西の方あり曹洞派の禪

刹あり江戸高輪の泉岳寺は属す當寺ハ文明年間吉良家

創建の精舎あり旧ハ弘徳庵と号其頃ハ濟家あり馬堂昌誉

禪師開山祖なり其後門庵宗関禪師中興の岡基ハ井伊掃部及

直孝彦同中興開山ハ天極秀道和尚なり

佛殿 本尊釋迦彌勒彌陀等の三世佛の本像を安置す

額 佛殿の

舟の軒掲る月二重家根

**選佛場**

選佛場 佛殿の右

**佛在式**

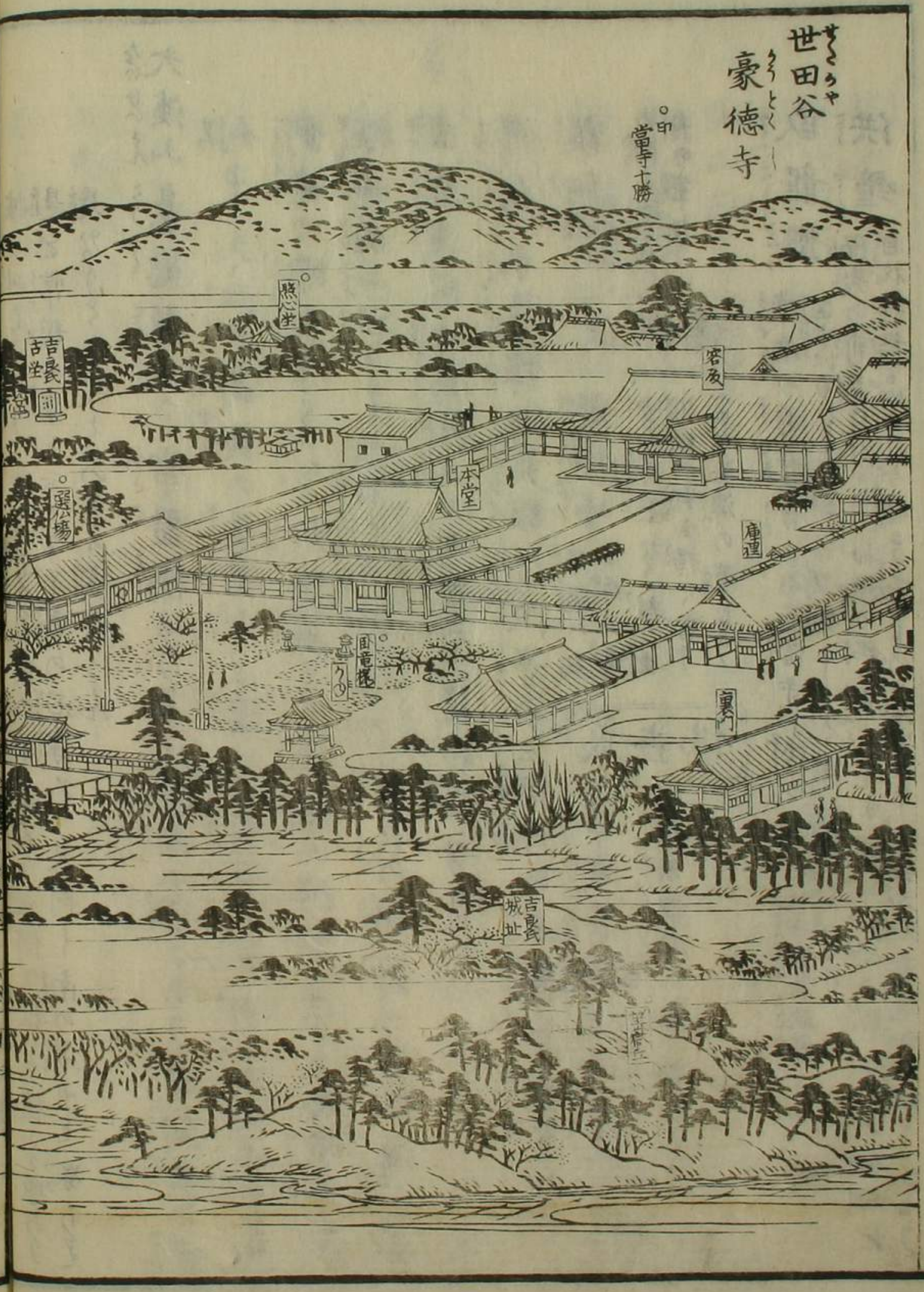
石燈籠 佛殿前左右に立す  
掃雲院殿の寄附なり

臥龍櫻 佛殿の前右の方あり當寺十勝の一かを往古吉良政忠

洪鐘 佛殿の前左の方あり鐘の銘ハ寛文十三年鐵牛和尚の製文中に和尙此

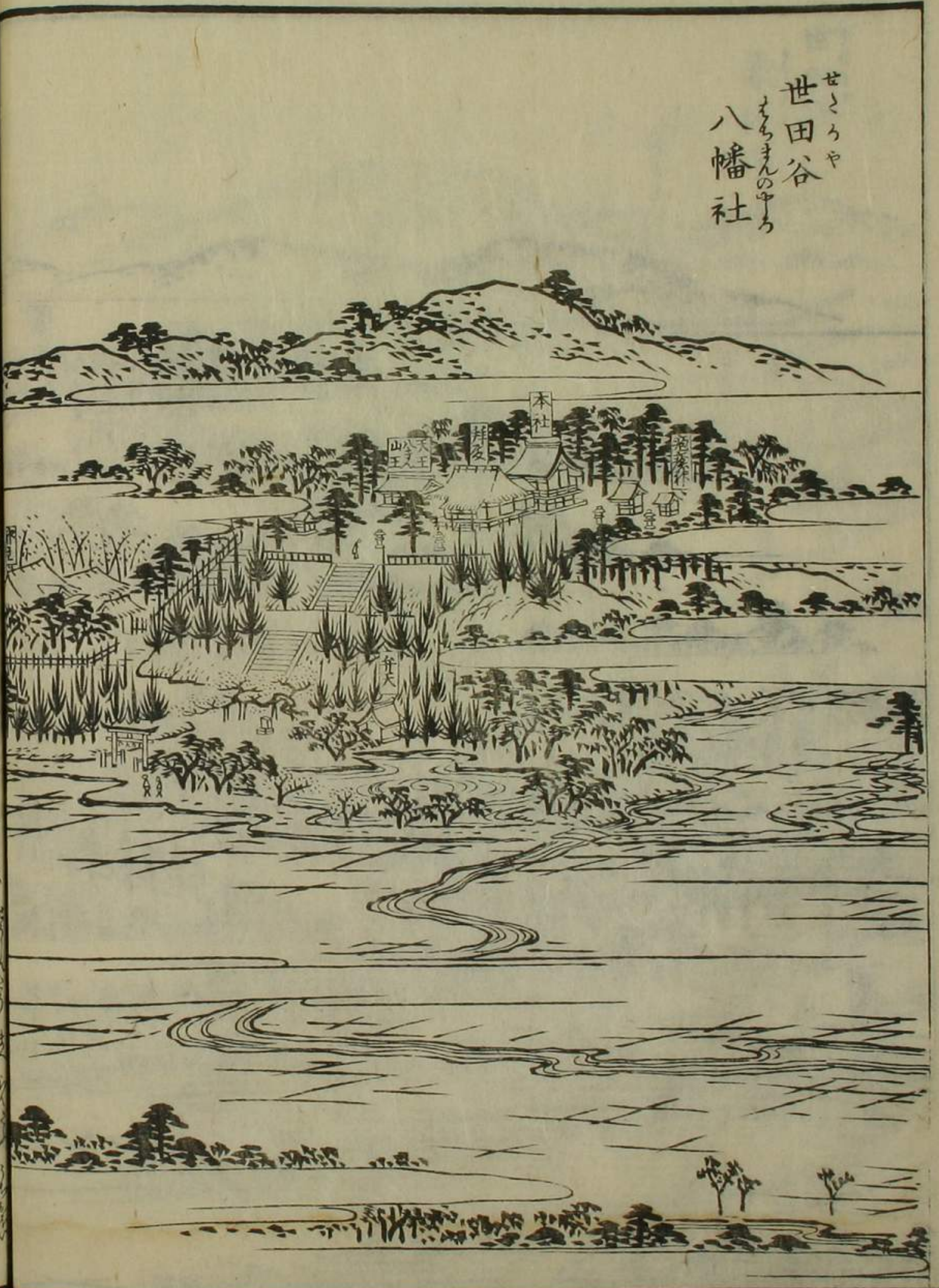
自校橋あり今存するものハ延宝七年中興天極秀道和尚銘なり







世田谷  
八幡社



照心堂

客殿の左林業の中あり  
當寺十勝の一員なり  
吉良氏古塋  
照心堂の前卯塔の中大の  
松樹の下あり古五輪の

石塔並に立一八世田谷所吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり當寺過去帳前  
開基同春院殿照岳道旭居士文龜二年壬戌六月十七日卒あり又一八政忠の伯母  
弘徳院久栄理椿大姉の墓なり弘徳院八當寺過去帳文明十二年庚子十二月  
二日逝あり

古石燈籠一基

同一墓の前あり政忠庭中のもの  
ありと云せよ云地藏形これなり

當寺開基碑

佛殿の西に立る寛政十一年の冬當寺十五世靈潭和尚の撰  
文あり往古吉良家小因ある者力を戮せし靈潭和尚の志を  
補助しこれを

碧雲関

徳門の名なりこれも當寺十勝の一なり  
其の黄鳥哺ハ同一門の  
左の叢林の中ありふの梅樹と云松柏壇も又同一方の樹林と云

清涼橋

徳門の前の小川に架かる橋の  
名なりこれ十勝の一なり

當寺ハ文明年間

十二年庚子世田谷所吉良右京大夫政忠  
其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地あり小基氏より  
此世田谷郷を賜り初て移住せし後世田谷郷と稱せり  
伯母弘徳院殿

久栄理椿大姉

の爲に創建せし所の精舎なり  
過去帳文明十二年  
庚子十二月二日とあり

直其法号を採く

弘徳庵と号け昌譽禪師を請く  
岡山

久栄理椿大姉の爲に創建せし所の精舎なり  
過去帳文明十二年  
庚子十二月二日とあり



祖とを 其始の清家 天正年間 至る宗関 禪師来り 薫席一洞  
門ふあゝゝむ 万治年間 江州彦根 城主正四位上 左中将 井伊  
直孝 彦此世 田谷の地を賜ふ 或寛永十年 万治二年 己亥六月

廿八日 逝也 法号久昌院 殿 豪徳 遺言ありて 令嗣直澄 其遺骸を  
當寺に葬也 故に 弘徳を 豪徳に更む 弘豪同音 爾後直孝彦の  
賢娘掃雲院 殿 無殊了心 禪尼 先考の冥福を 吊ひむらた免  
許多の 浄資と 喜捨し 堂宇を 経営し 三世佛の 木像を 安  
置して 良田數十頃を 寄らんとす

吉良氏古城跡 豪徳寺構の内 右の方より 續る地を云 今井伊家  
堀の形 二重の残り 空堀の跡と云 所もあり 其封内一町四方  
ゆゑに 櫓を構へしと 覺し 跡三ヶ所 迄存せり 又 居館の跡と  
稱するもの 築地 或ハ 林泉の形 残る水と 湛る地あり あり  
富士見松とよぶ 老樹あり 其地より 斜み 芙蓉の 峯を 眺望せり

旧の同一の所 櫻と稱せしものあり 後世 枯ると云 今ハ  
此樹なり 世田谷の吉良家 清和天皇 十世の 苗胤 足利左馬 義氏に 二子  
三州の 吉良と稱せ 義徳ハ 奥州に 居り 故に 奥州の 吉良と稱せ 是則 吉良姓の 祖なり  
義徳ハ 六傳を 吉良治部 大輔 治家と稱す 治家 始武州 世田谷 城に 住す 時 久の 人 世  
田谷 郡所と 稱せ 又 六傳を 吉良 政忠と稱す 法号を 同 春院と 稱す 其後 頼久の 世に  
至り 吉良家ハ 三州 東城 西城の 外 稱号ハ 直村 村ハ 住す 其後 頼久の 世に  
治命 あり 時 田と 号す 則 久良 郡の 時 田村ハ 住す 其後 頼久の 世に  
小田原 北条 家 園東を 領せ 今 世 田谷 領と 稱せ 村 教 五十七 箇 村あり 其 項一 圓 所  
領 其 貫 高 あり 今 世 田谷 領と 稱せ 村 教 五十七 箇 村あり 其 項一 圓 所  
領 其 貫 高 あり 今 世 田谷 領と 稱せ 村 教 五十七 箇 村あり 其 項一 圓 所

宮 坂ハ 幡宮 同一寺より 西の方 北岡 續あり 其間 三町計を 隔つ  
鎌倉 鶴岡ハ 幡宮の 摸や 勸請の 年 歴詳 ならず 天文 十五  
年 吉良 頼貞 當社を 建立す 云 或ハ 義家 朝臣 勸請せし 頼貞 御神  
義家 勸請と 稱す 祭礼ハ 八月 十五日 社司 大場 氏の 奉記 あり  
社内ニ 存する 此櫻ハ 頼貞 親植 云 傳ハ 當社 建立の 棟札ニ 注し 頼貞の花  
押と 等々 村 大平 某所 藏の 頼貞の 古文書ニ 印する 花押 尤 同一 然 時ハ  
頼貞ハ 頼貞の 始の 名あり



當社梁牌一枚 當社に蔵を其

天文五年八月廿日 齋同上月十日上棟 同廿日 卯御遷供養道師 鶴岡相兼院法印大和尚位快元  
當社八幡宮新建立大檀那源朝臣頼貞 鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗 熊澤入道々珎  
于時惣奉行江戸撰津守法名淨仙全奉行石渡戸新兵衛常久惣太 鶴岡義社 法橋丸喜  
西村左近將監吉重

延命山勝光禪院 豪徳寺の前の道を隔て向ふあり洞家の禪

刹中より八王子安下の心源院に属せり本寺ハ虚空蔵菩薩あり  
座像二尺計あり 作者不知 建武二年乙亥世田谷所 吉良兵部大輔

源頼氏開創の精舎なり 往古ハ海家の禪宗あり 龍鳳寺と号

豪徳寺所蔵吉良系圖ハ左京大夫とあり又當寺ハ相傳ハ頼氏法号ハ興善寺殿  
月山清公と号故ハ始當寺を興善山と号すと云ハ世田谷私記とあり又興善寺  
と治氏の法号ハ又豪徳寺吉良系圖の中ハ政忠の二男文貞とあり又興善寺  
の人の名の下ハ禪興寺とあり又諸説ハ其實を得ず 鎌倉建長寺の  
吟峯龍公禪師開山とあり 文和三年甲午 其後天文十五年丙午世田  
谷吉良家六世の孫左兵衛佐源頼康 豪徳寺吉良系圖ハ三位或ハ云

中興開基とあり然ハ天文元年癸酉同吉良家七嗣の孫  
左兵衛佐後四位下源氏朝 豪徳寺所蔵吉良系圖ハ左兵衛督とあり法号を  
實相院殿と号ハ茲卷の實相院を建とあり

當寺の号を勝光院とあり又天永琳達和尚 琳達和尚ハ小槻村梅林  
請し當寺ハ今の如く曹洞派の寺院と云 當寺過去帳ハ延命院殿高山榮久  
居士とあり 居士とあり 居士と云法名を載り疑ハ

當寺の山号此号あり 此延命院没卒の年号忌日を又何ハ  
經家ハ奥州の吉良家あり 又太郎と号せり人ナリ

愛縁薬師如来丈二尺半本像運慶の作なりと云相傳ハ往古  
北条氏康卿の息女崎君常小此靈像を崇信ハ天文六年の春

此靈像の靈ハより 時田の地ハ三千石あり 終ハ永祿元年世田  
谷所頼康卿の室とあり 縁記ハ云えりとの中興の

その中より尤拙文と云疑ハり少ハ 故ハ其文ハ畧

按ハ崎君ハ氏綱の女中ハ氏康ハあり



廣戸備後又三郎正之碑 當寺佛殿の右にあり正之は駿州の産也

柳宮社稷の臣なり高祖五郎久行江州廣戸郷と管領なる小因氏とす永祿十三年己巳召不應一と御當家仕たり後世を致して世田谷の地は退居慶長十年壬子十月十二日行年八十八歳中々終に依る當寺は葬せり延宝八年の冬孝孫行隆正武正次等とて立ちの

吉良氏古塋 堂前左の方あり頼康の古墳も當寺にあり

鶴松山實相院 登戸通道世田谷元宿の左の裏通弦卷村より

曹洞派の禪林也同所勝光院も屬を當寺ハ世田谷の吉良家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡也其閑居の号を字

翁齋と稱せしと云字翁齋卒去の後 九月六日卒とあり 賴久當寺を閑創あり法号實相院殿学翁玄誓大居士の文字を採く寺号を用ひ天永琳達和尚閑山と

本寺阿弥陀如来作詳なり 或ハ應天和尚も 学翁齋の墓碑境内にあり又當山閑關鶴松院殿快窓壽溪大姊と稱する石塔並ひ立鶴松院何人なるを

可尋 氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子なり今川の一族堀越治部少輔貞基の次男也駿州頼名陸奥守一秀の弟なり 弦卷郷 世田谷より此地ハ昔柔原右京進と

由永祿二年小田原北条家の所領役帳より なるを 世田谷八幡宮 同所あり相傳ハ八幡太郎義家朝臣の勸請

なりと傳則此地の産土神也祭礼ハ八月十五日なり 龍華山永安寺 長壽院と号ひ天台宗也東嶽山に屬せり

本寺子手觀音ハ惠心僧都の作なり 閑山も清仙上人 閑基ハ鎌倉公方源氏滿朝臣なり中興閑山ハ兼海

法印 俗姓ハ二階 同中興閑基ハ石井内匠兼雄法名と良賢居士と号ひ 龍華樹 堂前櫻樹を号く今枯 當寺の閑山清仙上人鎌倉大藏谷永安寺の旧地也

石井氏移瑩碑 本堂北の 相傳鎌倉公方氏滿朝臣 左馬及基氏 應永五年十一月四日逝去



あり永安寺殿壁山全公と号し仍鎌倉の大蔵谷に新に一精舎を造り直し其法号を採て永安寺と号し建長寺純曇芳和尚を請し寺主たりしむ建長寺瑞林菴の開祖あり夫より後満兼朝臣持氏朝臣相継て重修ありし永安寺十一年二月十日持氏朝臣此寺に於て自害せられしハ管領上杉憲実其男成氏公公永壽王幼推なるに依り暫く難を美濃國に避り然る嘉吉元年京都將軍の命を奉りて再び鎌倉に歸入りしと云々上杉の両執事良しとされし上を蔑し権柄を争ひ闘諍遂に止時なく享徳四年六月十六日今川上總介より鎌倉を追補せし當社宮殿民居に至る迄悉く灰燼となり永安寺も又廢せしと云ふ於て足利六世の繁昌一時滅し都會空しく草莽此地となりしを爰に二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣に仕へる不二股肱の臣なり永享の時公の後臣悉く永安寺に死す

信濃守一人公の遺命を承りありしを以て俱に死せしむるを免さしと云ふ適る其後裔孫名ハ某法名清仙と云者あり永安寺を鎌倉幕府世々の墳壟安鎮の地たりし荒亡年久しく兵馬馳走の巷とありしを患へて終に再復の願を發し延徳二年三月勝長壽院の門主寺記ハ持氏公の季子との命を奉りて此武州中丸郷大蔵村ハ其名鎌倉の旧地ニ同しを回授し禪刹一字を建立し鎌倉幕府世々の神主を安置し寺号をも又永安寺と稱す門主某の功を擧る長壽院と云當寺の天正年間當寺第六世良深より以後台密の二教を改る堂宇を修補せ然るに其父良賢居士の没後追福のため堂塔を重修し佛殿と莊嚴を是中興開基なり

不動明王画幅妙澤筆聖護院道與准后開眼せられしと云傳し即紙中ハ華押を注しあり



妙澤和尚嘉慶の頃の人中々足利三代義満公の時世に當り大草紙の  
妙澤和尚の法嗣中々不動明王の化身なり鬼の胎より好くして不動  
十八年道真准后東興下向の時其門徒なり松井坊は宿しおひこれを能眼あり  
附与紙中は花柳とあられしと後石井氏の家は傳へしと兼重と云ふ人の時當寺に

岡本半助裁許状一通 武藏七黨系圖 古写本なり

永川明神社 大蔵村よあり永安寺別當奉祀せり祭神五座大己

貴尊素盞鳴尊奇稻田姫手摩乳脚摩乳等なり祭礼ハ毎年

九月廿一日なり 相傳へし曆仁元年 九月九日遷宮同廿日 當地の主江戸氏

唯一宗源の社なりし其後二百有餘年を経る天文年間松井

坊とよ山伏奉祀の宮とあり 兩部習合とす 此松井坊ハ武州都筑郡

なり依て道真宗の十一面觀音の像を傳來しり引續當社の別當

補まゝの後水川明神の本地佛となり或云永祿の頃迄ハ松井坊奉祀

神職とあり再唯一とせしと云 當社昔ハ五所は並ひ建てる宮居巍々たり

一ふの頃の頃より荒れに唯此一社のを殘れしと云 然るに

別當は補はれしより再び習合の社となり 神躰及び本地佛

等と新は安置せしなりとあり 昔の神躰ハ江戸氏の兜の立物

や々黄金の瓶子は畠山重忠と銘しとありと云 されとも

の頃の頃より失いしより今ハなりしと云 今ハなりしと云

棟札一枚 當地石井氏の家は棟札は神主田中松井坊敬白とあり

面 哀愍衆生者 永祿八年乙丑正月十九日 田中ハ松井坊々俗姓ありし

武藏國 荏原郡 大蔵村 水川大明神第四宮 神主 田中松井坊敬白云云

我等今敬禮 我 我等今敬禮 神主 田中松井坊敬白云云

裏 再建副願主 長島源太郎 伊丹孫次郎

石井玄 蕃 河野大 學

大旦那 石井内匠助平兼實敬白云云

武運長久 庄屋



大野新兵衛 大工石渡

帶刀先生義賢之墓 大蔵村石井土の内殿山とりの地の東南

農家清水氏の宅地の傍ありと云先は清水冠者義高の後裔

清水源兵衛とある則土人ハ大将塚と呼べし

東鑑曰治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曾冠

者義仲主者帶刀先生義賢二男也義賢者久壽二

年八月於武蔵國大倉館爲鎌倉悪源太義平主被

討亡于時義仲爲三歳嬰兒也乳倉母夫中三權守兼

遠懐之遁于信濃國令養育之云云

相傳此地ハ義賢居館の旧址なり故小殿山の称ありといひ

天明年間此地の農民清水氏義賢の塚とあそきしり石壁の中ハ其後大永

吉乃及び砂金の類を存せしとありこれと崇あふり曰く埋蔵しりとあり

年間石井氏某法名良寛と云一人京都より此殿山の地に移り住せ

土人云く同所新坂の上神明宮の殿ハ或伊田中務大捕兼紀と云人の居跡

大六天の宮あり此良寛の霊と祭ると云

なりといふこと

按石井家の先祖良寛ハ武州久良岐郡金利谷の伊丹氏より小田原小属

これと中務大捕兼紀と名乗る其家ハ所傳なりと云後世土人傳説

のあり又先は奉る水川明神の棟札ハ石井内匠助兼實とあり良寛の

子ハて其子孫今猶連綿と云

大神宮祠 殿山の神あり永安寺より別當兼帯を神木ハ

石井神社 弦巻村より西南の方大蔵村石井氏某地ハ

郡ハ属を明暦より己降 祭神詳ならず寛永年間石井氏兼忠社と

多磨郡ハ入りたり 舊地ハ石井土より今の地へ移り稲荷と相殿ハ合祭せり又近世

故あり同兼昌磐井と齋の假名ハ違へとも其訓の相似と云

以て斎稲荷とも称せりとあり土人云當社ハ武蔵國荏原郡二

座の内延喜式神名帳ハ載らざる磐井神社是なりと

日本紀等ハ伊弉或ハ伊波ともあり一字二訓なり土人云磐の文字最筆畫多く

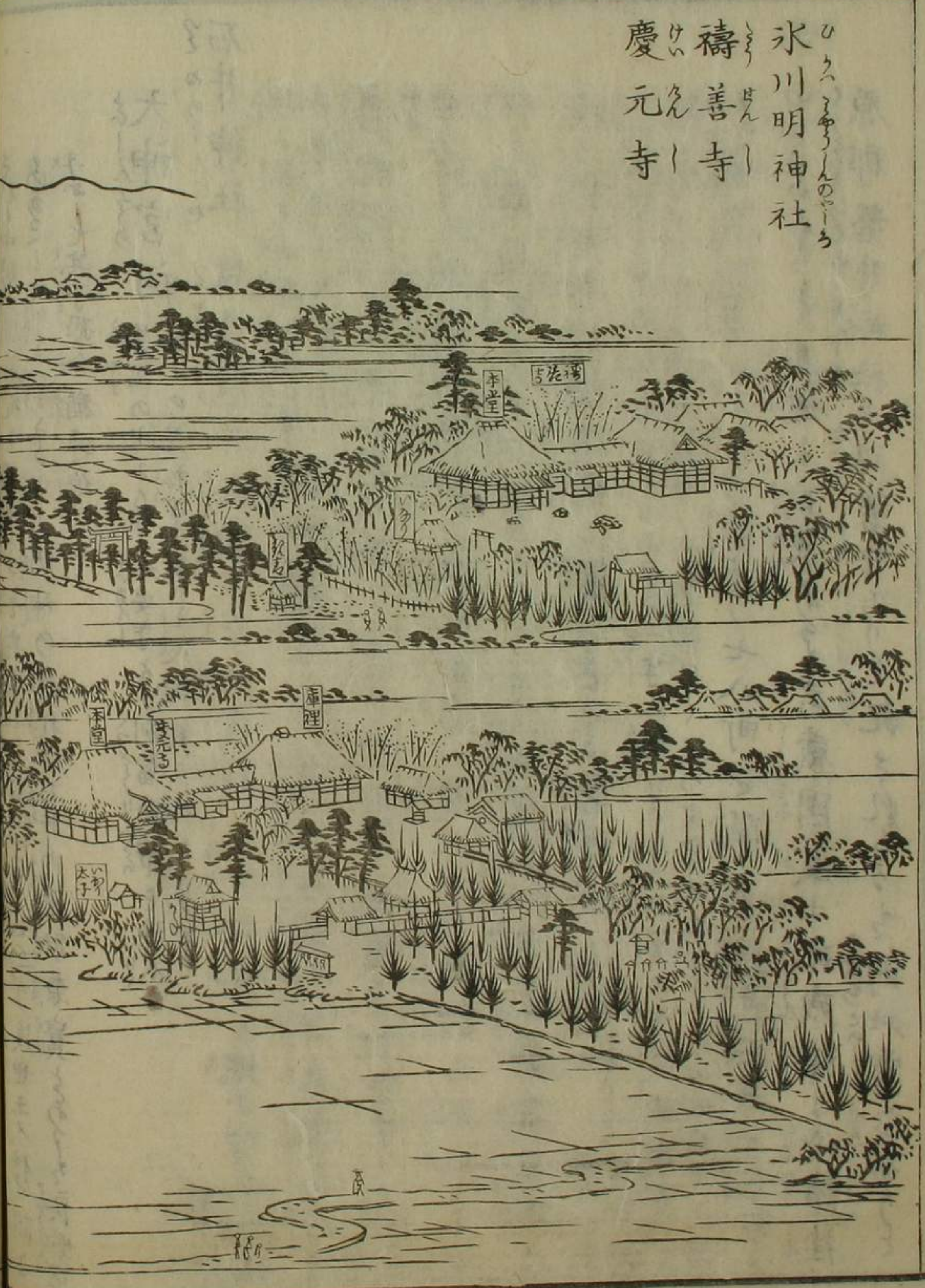
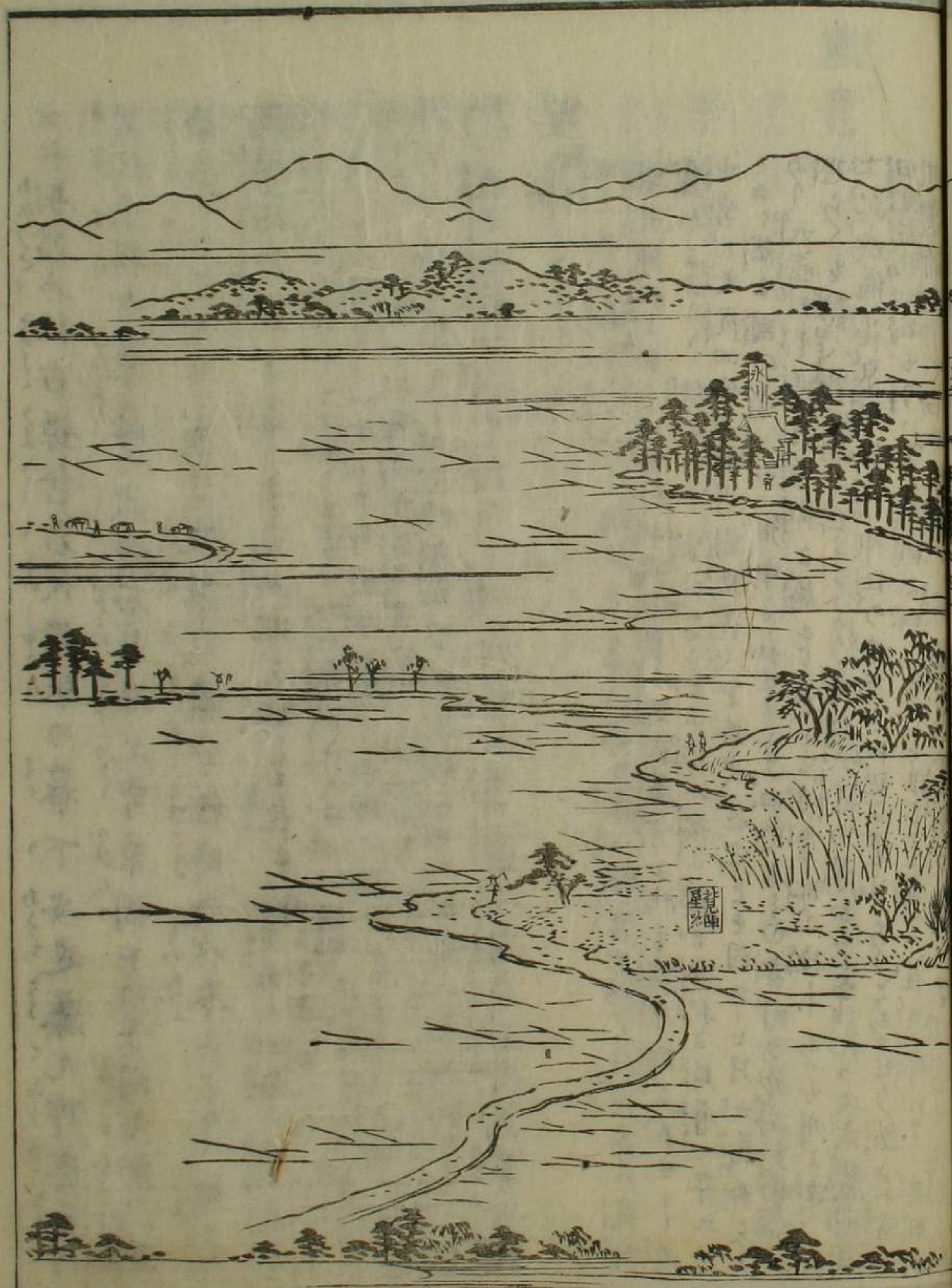
改めり其便ありと云石の文字ハ改りとも地名の文字

その例多し 舊地ハ今の社より七八町を隔て同邑石井土谷や

つらふあり其地ハ甘泉あり武蔵國風土記殘編ハ所謂荏

原郡磐井神社の辺磐井ありと記されたる則此靈泉ありと





氷川明神社  
善寺  
慶元寺



云云相傳へ往古鎌倉右大将家の幕下安達藤九郎盛長の  
孫同出羽守景盛の次男石井石見守兼周との子同左衛門尉  
兼章仁治元年庚子執權武藏守経時の吹挙より始る  
武州石井郷を賜りて此地に移り住む  
石井郷は明暦の頃大蔵邑  
今大蔵邑に属す此地古き御園帳ありひひ古碑の類ひひ在る大蔵邑古の地  
燈籠あり又等々が満願寺古文書の中弘治二年丙辰十二月十八日吉良左衛門尉  
頼康より賜ふ所の文大蔵村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫満願寺へ一貫  
分と故に石井を以て氏とす則當社とす宗一なり石井氏累世鎮  
護の神とすとのいふ

按は荏原郡不入斗村鎮座す御人鈴の森八幡宮を以て社司等ハ式内  
磐井神社と稱し又石川中納言豊人卿武藏守は任は荏原郡に在せし頃  
靈ホより経始せし御社なりと云傳は續日本紀延暦七年二月  
中宮大夫從四位上石川朝臣豊人を兼武藏守とす同年七月大蔵郡  
と云然は國の守上古の府中に在せし頃舊國の府古多摩郡に  
あり大蔵村は項荏原郡に属すといふ多摩郡は接しあり武蔵國風  
土記殘編荏原郡磐井神社の條下は社邊は磐井ありとあり然り當法  
旧地石井土谷も今多摩郡に属すといふ

東覺山吉祥院地藏寺と号は大蔵邑の南鎌田村あり天平  
十二年庚辰行基大士開創を新義の真言宗なり小杉の西明  
寺に属せり

本堂 本尊地藏菩薩 立像長一尺七寸 行基大士の彫像なり  
不動尊 同堂内に安置を良弁僧都の作り  
印子歡喜天 弘法大師の作鎌倉副元帥 七觀音画影 興教大師の筆  
當寺盛なり一頃八仁和寺に属せし頃久安四年己辰守覺法親王兵乱を以て  
此地より下りて同年中夏の頃初秋に至る適當寺に宿せし頃項寄附  
あり日輪弘法大師画影 壁紙宗論の序影なり同大師の真筆  
縁起曰天平十二年庚辰行基大士勅をせり諸國は伽藍を  
造立しものより其頃當國に至るなり然り此地は興六十を  
かり貧女住と幼り地藏を信じ奉りて稱名志すも  
止時なくも供養しものより彼貧女一日行基菩薩の允許を



未来成佛の道と問ふ。同十三年辛巳正月廿四日行基菩薩  
此地に至るたより地蔵尊の像を彫刻ありて之を貧女と与て  
曰く此地ハ則チ有縁の霊地なり故直ニ精舎を営む。吾  
其勝地を卜き一柱杖を以て地上に畫し之を定めて  
敷云其依て貧女ハ其項世に地蔵尼 薙染し寺院建立の大志を  
企つて同郷の富民秦氏某なる人糧財を喜捨し田園附  
これ精舎僧坊悉く落成し称名散花梵唄の声絶みなり  
是然ニ建武二年の兵乱ニ堂宇悉く灰燼となりしより己降  
本寺の假ニ草堂を安しなりし遥の後世田谷の吉良氏不  
測の靈夢を蒙り大ニ崇敬ありて寺院再興ありしと竟に  
天正の頃小田原北条家没落の後ハ吉良氏の家も共ニ亡び  
しあり其後ハ漸ク香花の備も少なりて今ハ僅ニ草堂  
一字を存するのみ

觀

音寺 吉祥院あり八町あり西の方宇奈根村あり當寺ハ  
永正年間天台の沙門實海 河越喜多院第十四世なり 創建も亦の  
寺院中ニ深大寺ニ屬す本寺十一面觀音の本像ハ傳教大師  
の作なり故ニ寺号とせりとのみ 昔ハ相州小田原あり圓正寺と号  
ありて之をひく寺号を更むとのみ

荒井對馬治義墓

當寺あり相傳ニ治義天文中上野國新田あり知  
天正元年癸酉二月十七日没する由碑面より之を記す此地ニ  
荒井氏の子孫今ニ連綿として相續するものハ此也

永劫山慶元寺

華林院と号觀音寺あり七町あり西の方喜多  
見村あり淨業の精舎中ニ木札の泉谷寺ニ屬す

本寺阿弥陀如来の座像ハ一尺計ありて惠心僧都の作なりと

云開山ハ真蓮社空誓上人と号せり當寺ハ江戸遠江守の後裔

江戸刑部少輔頼忠の子と江戸攝津守朝忠とあり此人も頼忠ノ同  
屬せり頼忠の次男勝重と若勝忠より江戸氏を改め其米邑喜多見の地名を以て氏



喜多見若執守勝重と云ふ小田原没落の後遊客となり御當家は属し喜多見  
旗本江戸御當家内居城の地なるを以てちを改てり勝重の三男喜多見  
五郎左衛門重恒其子若執守喜多見氏建立の寺院なりとのみ  
動政より後其家滅す

天神森 慶元寺の前小高き岡あり 北見氏陣屋 歌枕天神と号し  
奇枕の来由 天王を相履とせり 相傳往古澤庵和尚堺南宗寺小

勸請せしれを兼應年間喜多見久太夫重勝大坂あり  
頃神木の梅樹と共小この地に移し自の園中勸請を天神

森其旧跡なりと云神影ハ画像なり古土佐の筆と云後故  
あり此地石井兼重の家は傳へ梅樹も又自庭前遷たり

一後兼重の子通兼と云人大藏村の永安寺安置せり  
なり故永安寺やも神木の善木あり

除蝮地神符 北見村の内宿と云る地に住る農家存藤伊右衛門  
某々家へ傳へ毎歳四月八日は此神符を猪人よ与へ蝮蛇に

殺れらる人此家へ至る禁呪を乞へハ忽ち痛を去毒を消  
せり其奇なり其神符永安二年未九月廿日存藤道善

藤原忠嘉再改之と注したる  
普命山禱善寺 華藏院と号同所北の方へ廻り三町餘あり

あつと天台宗やと云深大寺村の深大寺に属せり 永川明神の別當  
坊と号 寺やと昔宮本

本座の像を置り往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那と云  
江戸太郎重長より五代の孫江戸彦次郎

常光の子中田原北条家へ属す  
薬師堂 本堂の前法の方より立像一尺八寸計の本像中作者あり  
故は道俗宿薬師と云

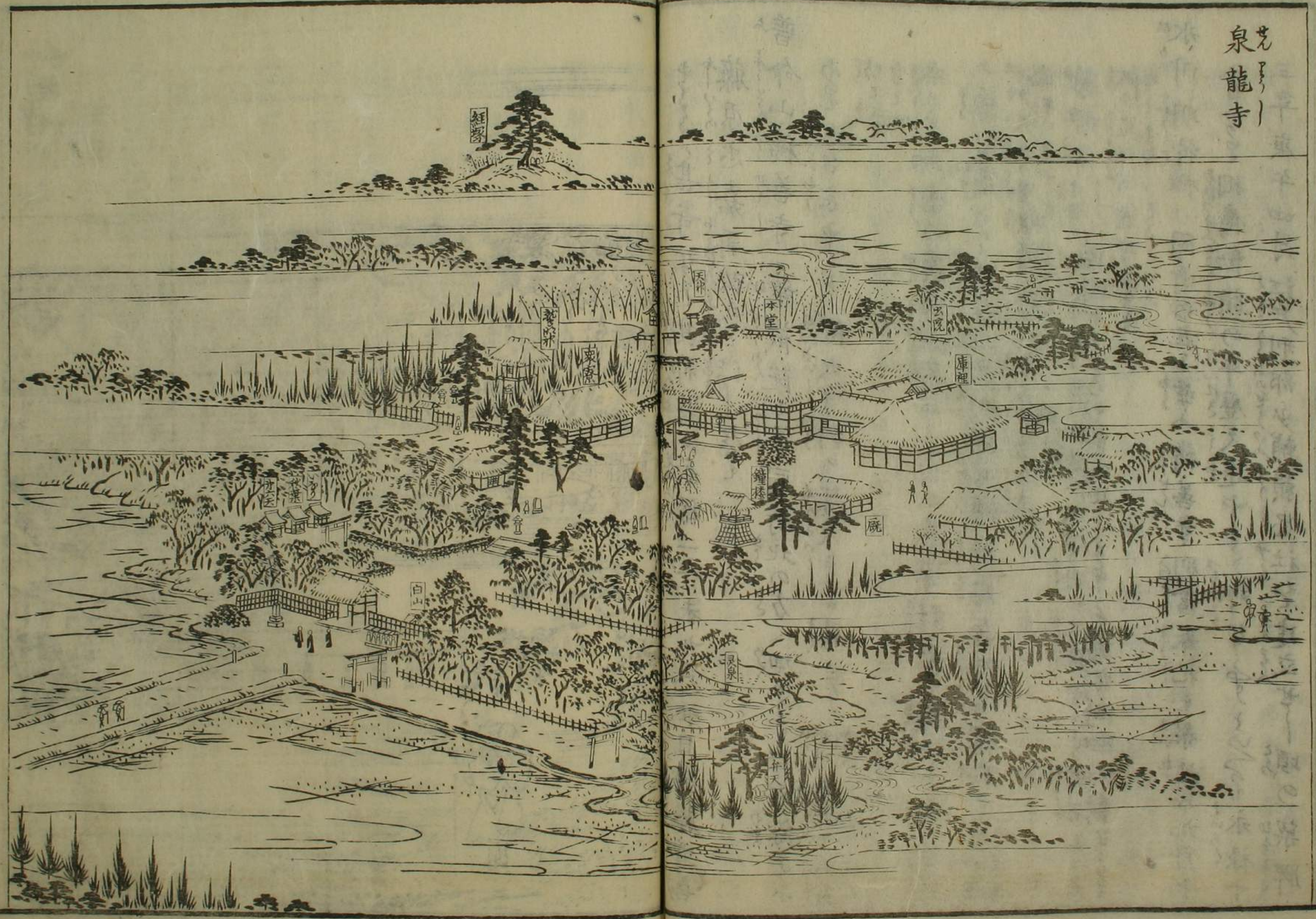
永川明神社 同所の左に並み禱善寺別當奉祀を祭礼ハ九月十  
八日なり相傳勸請の年歴久遠なり詳ならずと云る永安十

三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せり頃の梁牌

三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せり頃の梁牌



泉龍寺





和泉村  
靈泉



一枚當社に存す

寛永二年五月江戸氏の遠裔喜多見勝重當社を重建せしと云

梁牌銘曰

別當宮本房

代官 香取新兵衛

奉 聖主天中天 加陵頻加聲  
再造水川明神社 頭一等天  
哀 愍衆生者 刑部少輔賴忠 納受依

大工石渡  
鍛冶正吉

同背面曰

于時永祿十三庚午歲卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表 左石柱小美應三年甲午九月喜多見氏久大夫重勝同五郎左衛門

馬頭觀音堂 華表の右の方にあり喜多見重勝の乘馬の覺れしを

戸遠江守旧館地 水川明神の社地より一丁計巽の方小

篠の根雜乃を名つ今ハ除地とす延文三年十月十日

江



竹澤右京亮と共謀と矢口の渡中々新田左兵衛佐義興と  
亡したり江戸遠江守是なり

雲松山泉龍寺 氷川明神より八町を隔て西北の方和泉

村ありと曹洞派の禪刹中々相州高座の宝泉寺に属せり  
本多釋迦如来の坐像ハ八寸計ありと脇士中々阿難迦葉此

像を置るも又七寸脇檀は聖觀音の像を安置せ良辨僧都の  
作ありと云當寺ハ良辨僧都の草創中々往古ハ法相華嚴と

兼大伽藍なりとある中興と鏡斐瑞牛和尚と号ハ相傳  
孝謙天皇の御宇天下大旱懸す依良辨僧都請雨の

法を修せられハ奇特ありと清泉湧出と云即門外南の方ハ  
有靈泉是なり

ある地と加へんと  
靈泉徳門ハ并ひて右の方ハありと觀の樹根根の湧出

沸くも此池水つる早懸やと枯るも此近里悉く耕  
田の用水ハ引とつと寺号ハ此靈泉ハ依名村と云

池の中島ハ蛇形の弁天の像を安せ宮居  
あり此靈像ハ良辨僧都の作ありと云

經塚 寺より後の方用水堀と越一丁あり良の方畑の中あり少き岡の  
印と此樹下ハ古碑六枚あり一ハ上ハ梵字を刻し下ハ六字各号と記し左右ハ

明應三年壬申六月十一日とあり又左ハ自作是念以何令衆生得入無上道速成  
就佛身とあり其餘の四枚ハ鉄擲と文字讀得

松本山廣福寺 昔ハ稻毛山と号しと菅村の内府中往來の  
道ハ右の方四町を隔てあり新義の真言宗中々三ツ瀆の

高勝寺ハ属也本多五智妙法ハ座像九尺計ありと岡山を慈覺  
大師中興ハ長辨阿闍梨と号

觀音堂 本堂より後の山の上あり本多五智妙法の像五寸ありとあり此堂中  
重成の肖像ありハ重成以下の位牌を置

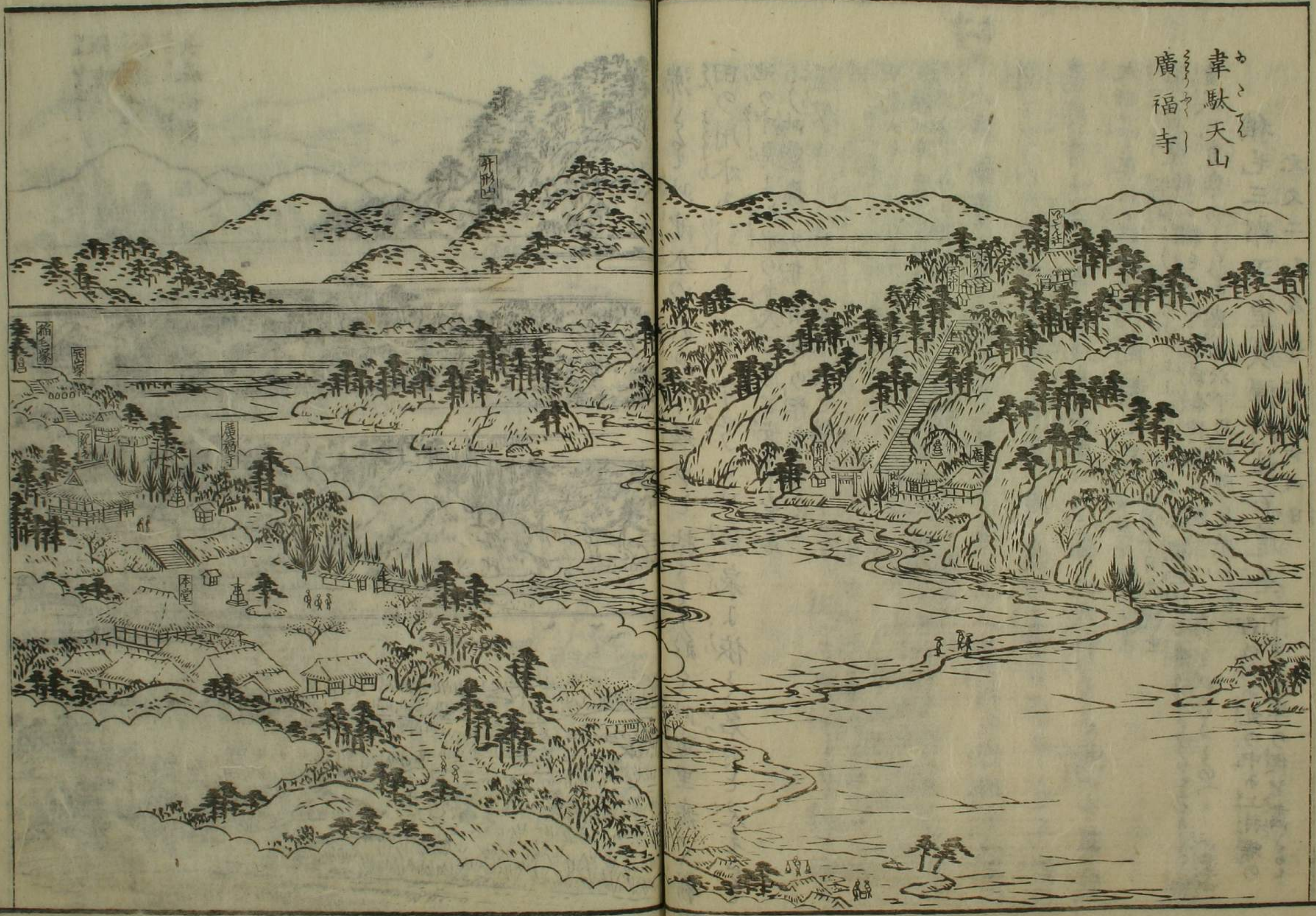
稻毛三郎平重成禪門法名道全

名の上丸の中ハ上羽蝶の  
下ハ一文字の夜を畫

元久二乙丑年六月廿四日

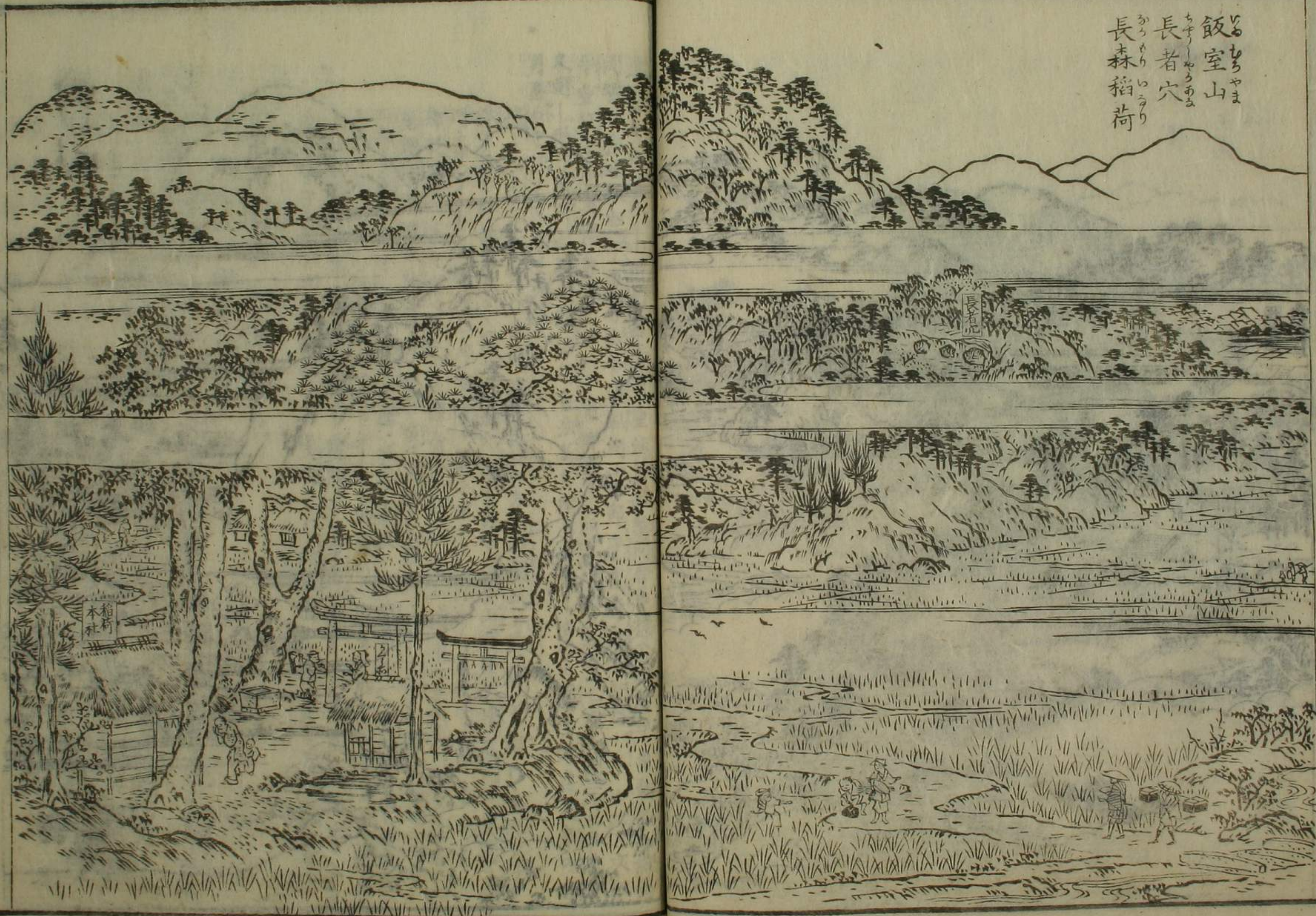


韋駄天山  
廣福寺





飯室山  
長者穴  
長森稻荷





雪ヶ坂



其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舍弟榛谷四郎平重朝法名諦悟  
同朝の榛谷太郎平重秀法名蓮風同小次郎平重秀法名如月一子小澤次郎  
平重政法名真悟等以上五人の靈牌ありのりし元久二年し丑六月二十三日とあり  
又同形の靈牌ハ森五郎平行重法名玄理と注せしりも存せられし没卒の年  
月忌日を注せしり追考あり

按元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政の詭詐を請け重忠父子を  
誅せしむと詔あり同北二日由比濱に於て畠山六郎と誅を同日申刻二侯  
河内招く重忠愛甲三郎季隆を前中として誅せしむ後小次郎重秀ありし  
郎後等自害せし翌日又鎌倉中騒動を三浦平六兵衛尉謀る榛谷四郎  
重朝同朝男太郎重季次郎秀重等と経師の谷小誅を稲毛入道ハ大河戸  
三郎ありし誅せしむ子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一誅せしむ由東鑑  
にありし何れも此時死せし人なり重成の一族ありし當寺ハ靈牌を置  
けり又按榛谷太郎當寺靈牌ハ重秀とあり大系圖ハ重季重子作るれり考  
重季とあり同小次郎靈牌ハ重秀とあり大系圖ハ重季重子作るれり考

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月十四日

かく注せし靈牌ハあり寺僧も其人とありしとあり東鑑ハ因く考ふ不即稲毛

三郎重成の室なり明けり

東鑑曰建久六年乙卯六月二十八日辛巳稻毛三

郎重成妻北条慶於武蔵國病惱太危急之由飛脚

到著下略

同書曰同年七月四日丙戌稻毛三郎重成妻於武

成國他界日來病惱頻雖如鶺鴒終被侵風病畢重

不耐別離之愁頗倦勇敢心忽遂出家云云



稻毛三郎重成墓 觀音堂の後の方山の土にあり小き五輪の石塔あり半土中に埋れり  
當寺境内の櫻樹多く春時爛漫なり故に近邑の土人閑花の時を待済く此地の事を宴を催し運々たる春の日も夕暮惜く思ふなり

韋駄天宮 廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹にあり廣福寺奉祀まろあゆしく韋駄天の多像ハ廣福寺の佛殿不安置せり祭礼ハ九月十五日小修りす

升形山 廣福寺より南の方の後の山を云稻毛入道重成居城此旧趾中々山頂八町四方あり升の形状をみゆあふ号く

重成ハ小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聲とて秩父大夫重弘甥重忠後弟中々頼朝公の幕下小属と

稻毛の地を所領とせ然ハ重成ハ重忠と日頃不和あり牧の方

共ニ時政は諛しこれハ元久二年乙丑六月廿二日重忠野心企とて時政勢を向け畠山一族を誅伐せ重成親族の好を忘れ重忠を讒害せり天道ハ肖の罪道とて終に和田義盛大

河戸三郎宇佐美与一等を以て武蔵國へ發向せり同廿四日稻毛入道父子を誅せり東鑑北条九代記等の書ハ見え

たり 稻毛と稱す地尤廣大なり登戸の渡より川崎の辺までの地は江戶守同領と稱して往古ハ四萬八千石の地なり又小田原記ハ信玄江戶を廻りて小田原へ下野守伯父甥の所領稻毛庄十二郷あり又小田原記ハ信玄江戶を廻りて小田原へ押寄むとすとのみ条下ハ夫の發を船中より稻毛の平向と云地ハ長尾鈴木  
十六郷と追補せしあり又永祿二年北条家の分限帳ハ竹内本月の倉長尾鈴木小田中分鹿島田端宿中田分鹿島田中村分夫向平向深屋屋住久未長久本小田溝口平の村高田等ハ稻毛の内證又同頭北条家の武士行方澤山明連の家臣田島兵部左衛門之房横山武部弘成駒林圖書定朝等皆此地に住し

飯室山同所左の山續々山頂ハ七面富士浅間を勸請す  
長者穴 同山の東の裾より入口ハ一間四方ありなれども窟中甚廣く同一程の巖室ニハ並ひてあり土人も重名義をたす



長森稻荷社 同所四丁計を隔て菅生村府中往来の街より右の方蒼林の中より同所日蓮宗安立寺奉祀せり

祭神長森稻荷明神右星夜明神左海光耀明神以上三神

券族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通相狐神阿参玄狐神阿權白狐神以上五神

相傳元祿十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲とてこの

花洛より一頃鳥羽繩手にて一人の美女と逢ふ其美女の云く

我ハ伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりとて靈ハ

り翌の十一年の夏四月廿日又神告あるに任せ江戸に至り麻布

日ヶ窪に住る中原与兵衛といふ者の家に勧請なり大奇瑞

靈驗あり然小正徳五年の夏の頃左仲没するの後一子如藤次と

て者此御神と讓請く信を終小元文五年十一月安立寺の

主僧日現上人此地に遷しその法華勧請の御神とな

せり中原与兵衛の御神とて有偶次兵衛といふ人此神とて信一稻穂の根村の御神とて信一稻穂の



大師穴



宝物

雪う坂 飯室山の南の嶺より曲折して西へ下る坂路と云登戸の

辺より平村辺への通道なり頗る美景の地なり

薬師堂 長尾村の内二子街道の右側山の上よりあり本尊茶師

如来の靈像ハ影向寺の本尊と同本なり慈覚大師の彫造

なりと云秘佛なり常小拜するなり天台宗同所妙樂寺別當なり

大師巖室 土人大師穴と称し薬師堂の山の後西向のありあり

入口ハ一間四方ありあり空中ハ二間四方なり高サも相同し

享保の頃一人の山伏心願のよりありと云断食なり此窟中ハ一七

日の間籠まりたりと云はるるのよりあり大師と称する所謂ありあり

今窟中ハ青石の古碑四五枚あり

五所権現社 薬師堂の南の山嶺よりあり祭神詳ありハ神躰ハ

何れも座像なり文七八寸あり鳥帽子を冠りありあり

僧形のものあり都て五躰なり荒木彫り古物あり毎年

正月二日 桃樹の枝を伐て弓と箭を放つ旧式の祭あり

杉山明神祠 相州厚木街道溝口の驛より左より入て十六町あり

南の方久本邑よりあり上の宮と称するハ別當龍基寺天台宗深大寺に属す

毘沙門堂の作るの西の山嶺よりあり其間一町あり隔つ下此

慈覚大師の作るの堂の左の方石階の上よりあり祭神詳あり

宮も同し寺の堂の左の方石階の上よりあり祭神詳あり

の当社ハ延喜式内同國都筑郡星川邑鎮座の杉山神社の

模あり祭礼ハ九月廿九日なり此社ハ觸穢の者請れハ必災

稲毛薬師堂 野川邑の内府中往來の道より三丁計西よりあり

醫王山影向寺と号し天台宗多摩郡聖武天皇の御願なり

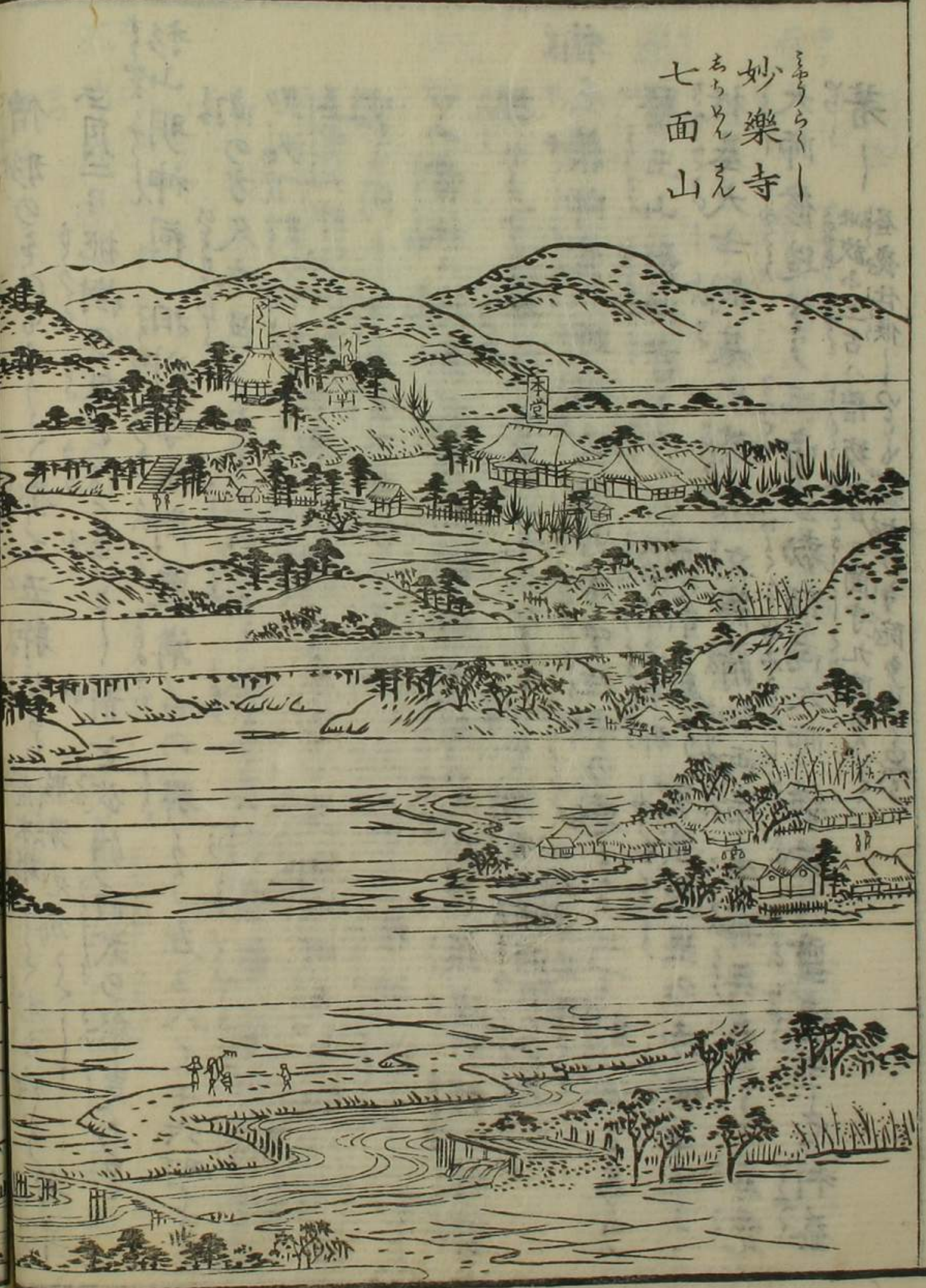
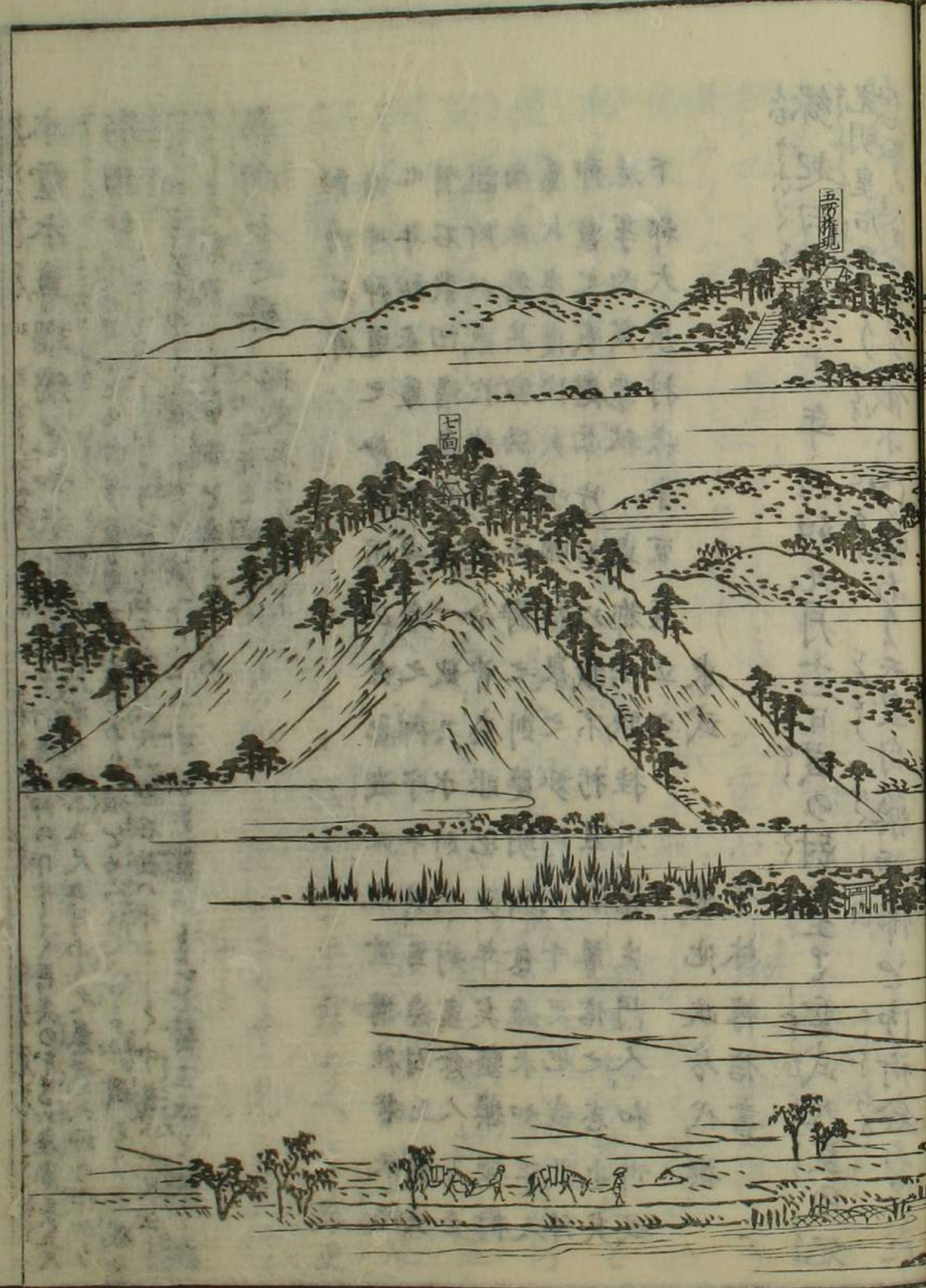
行基大士開基を其後文徳清和兩帝御再興あり慈覚

大師修造せり三帝の勅願兩大師構堂の靈場中ハ利益

著し此故ハ上古ハ僧坊百戸三箇寺九院あり

昼夜仕候し盛大の寺院あり





七面山  
妙樂寺  
七面山



本堂本尊瑠璃光如来  
 影向石 又佛足石とも稱す堂前右の方あり垣をめぐり入口より戸鎖あり一尺五寸計の四なりおあり常々水と湛へく上小家根を覆ふことを醫王水と稱し病影向石之碑 其文左の通り

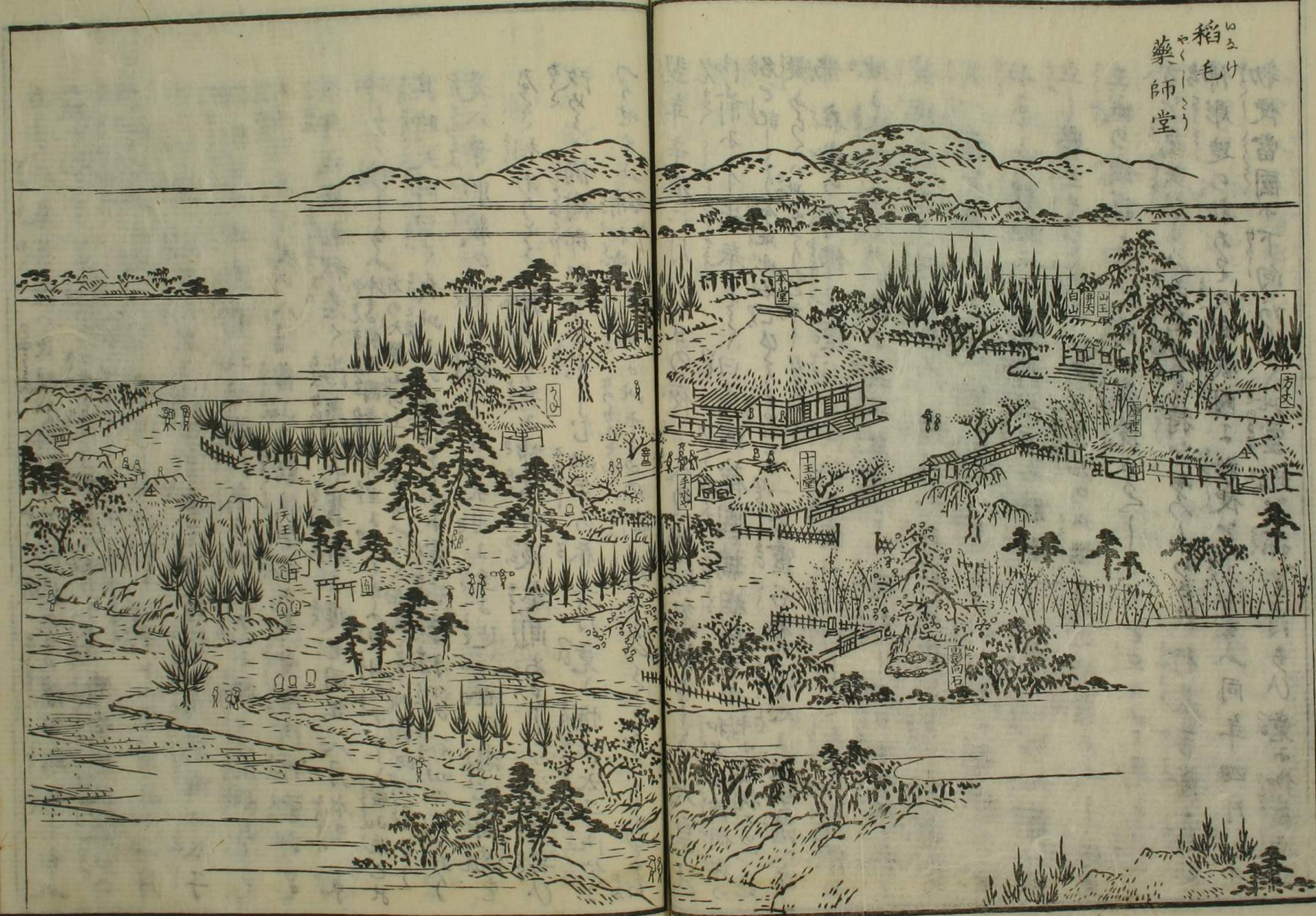
影向石碑之妙聰明正直也哉此地堂構往管天平  
 鳴呼神道之妙聰明正直也哉此地堂構往管天平  
 有石象凹清泉常滿余曾飲其水則沈病盡愈人々至誠未得其驗於神也矣禱之則雙明漸愈未如平人焉大威德而矣鳴呼靈泉之妙且潤千累也哉敬拜神靈威德而矣鳴呼靈泉之妙且潤千累也哉敬拜下延郡大泉村森本直東武

菊池政房代撰  
 平林博信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の刻小至聖武天皇の妃  
 光明皇后是なり俄小沙惱あり天皇自藥師佛と祈念わじに

翌年辛辰二月十二日の夜一人の沙門忽然とて天皇此  
 沙前小イ告奉りて曰く武蔵國橘樹の里小和名抄橘樹郡の  
 名と記し今此地名とひりて一の靈石あり中心に水を湛へり  
 佛在世の時佛此靈石に向ひ三國小飛行して永く有縁の  
 地よ止る一と云く然らば其石忽然とて飛行して此日本の地に移り  
 彼地よ止まり件の靈石ハ釋尊の沙足を捧げ奉り大蓮花の  
 其一葉を踏とめて末世に残り置り所實は奇特の靈  
 石よして彼地も又靈佛安座の勝利なり早く一の伽藍を建  
 立し醫王と安置し皇後の沙惱立而平愈あり一殊更  
 王城の鎮護として國土豊饒とて坐を立ちて見く其行  
 方を見失ひて天皇此奇特をありしをされ行基菩薩は茶師  
 佛彫造の勅あり又武蔵國は勅使を下しり同年四月八日  
 勅使當國小下向りて此靈地を探り得りひ竟小伽藍造立





稲毛  
薬師堂



あり又行基菩薩ハ良材を得て、業師佛の尊像を彫刻し、  
此地と云ひ五十余町、其の方倉と号す地ハ一の池あり此而  
夜毎に燈籠を燃せ又右の山嶺も四月八日より燃せり  
後橋樹郡の地を以て寄附し、時ハ天平十二年庚辰十一月  
なり、  
文徳天皇の御宇ニ當テ、惟喬惟仁、弟同胞の太子  
御位定の時、慈覺大師、惟仁皇子の法爲不種々の祈あり、  
天安元年丁丑の八月、當山ニ勅使を立ち、一堂塔法再營あり、  
翌年戊寅、初秋、悉く落慶し、舊觀ニ復せ、同年八月、本寺を京  
師より移し、  
其時大師曰く、我此山の躰を、  
是ハ葉胎藏の徳を備へ、  
乃と相ありと、  
勅使と共に、  
改め、橋樹郡を寺と充し、  
つせり、  
是偏ニ此本寺の衛護のよづく、  
乃と相ありと、  
勅使と共に、  
改め、橋樹郡を寺と充し、  
つせり、  
是偏ニ此本寺の衛護のよづく、

なりんと威徳山と号けられ、近江國蒲生郡の地を、  
附の宣旨あり、

十三塚 土人ハ十三本墓と号す、  
野川村の耕地の中、  
散在せし雜樹、  
相傳ふ新田佐兵衛、  
為小伐せり、  
矢口の渡り、  
時随ふ所の家臣の墳墓

舟田 子母口村の内府中道の右ニあり、  
二十歩を幅、  
幅十四歩あり、  
水田なり、  
舟の形あり、  
其回り、  
悉く陸田なり、  
舟河原と稱せり、  
地ハ社あり、  
十町あり、  
東ニ當り、  
今ハ民村の字とあり、  
次の橋明神の奈下と合せ、

橋明神社 同所府中道より四町あり、  
右の方山の上ニあり、  
別當者、  
真言宗、  
蓮衆院と号し、  
祭礼ハ隔年九月九日ニ修行す、  
祭神ハ弟橋媛と祀り、  
云神體ハ一尺三四寸計あり、  
男躰女躰ニ



十三塚



軀を安置せり

女勝ハ弟播磨  
男勝ハ日本武尊

勸請の始詳なり

此地の人他邦へ

如きありあつて必先當社に詣りて然して後發足せり此路中過あり

とて大に恐怖せり

古文書一通

子母村の里正伊藤氏の家に蔵を子母口  
背ハ波口なり此書より明けり

波口郷目録

一町 大戸宮 神田

二段 立花宮 神田

領家方 能登出作

宇田壹町四反

田壹町 散在

合貳町四反

此内四段小せきあんちりり先のせき  
以上一貫貳百三十七文 分錢

以下略之

若松孔那代國經ノス武藏國稻毛ノ新庄ノ内









登戸宿



登戸と渡



とも云てその説一なるは舟田もその所船の着て

右近屋敷 社地の右より農氏藤七とあり居住す右近古ハ當社と奉祀の

左近屋敷 同社地の左より藤七ハ未裔なり今猶連綿とて子孫繁昌せり

橘姫神廟 社地より二丁を東に當り山の中腹あり

相傳日本武尊東征の時此海上逆浪の災に逢ふに頃弟橘姫の

御衣及び冠の具を流し寄たりと土中へ収めり旧跡ありとの

大戸明神 橘明神の社より後二町ありを回り西の方北山の上

あり蓮乘院兼帯す祭神大斗乃辨神を祀ると云 神世七代の中

意富斗能地神と云 神躰ハ一尺三四寸あり男女の容貌

中々二軀あり 形ハ大斗乃辨神の神影なり 祭礼ハ隔年九月

九日修行せり

龍宿山最明寺 金剛院と号丸子街道の西小杉邑あり新義の

真言宗や江戸愛宕下の真福寺は屬せり大日如来此木



最明寺

田國雜記

ゆりまの

里あき

うめさ

東路乃

まり

この

里

新

川

あ

やせめ

と

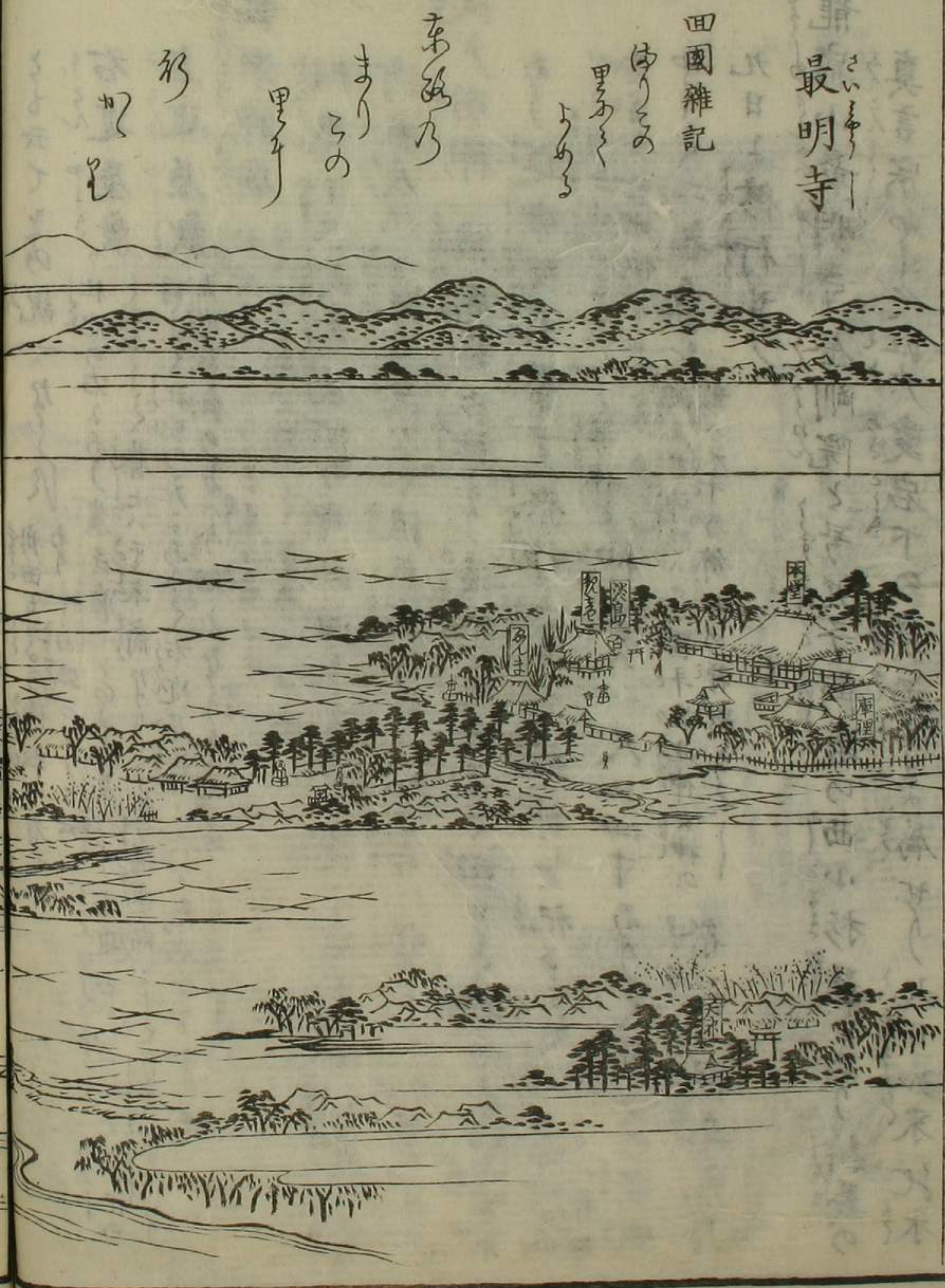
あき

これ

あ

物持とのみおみ  
いりりり云々

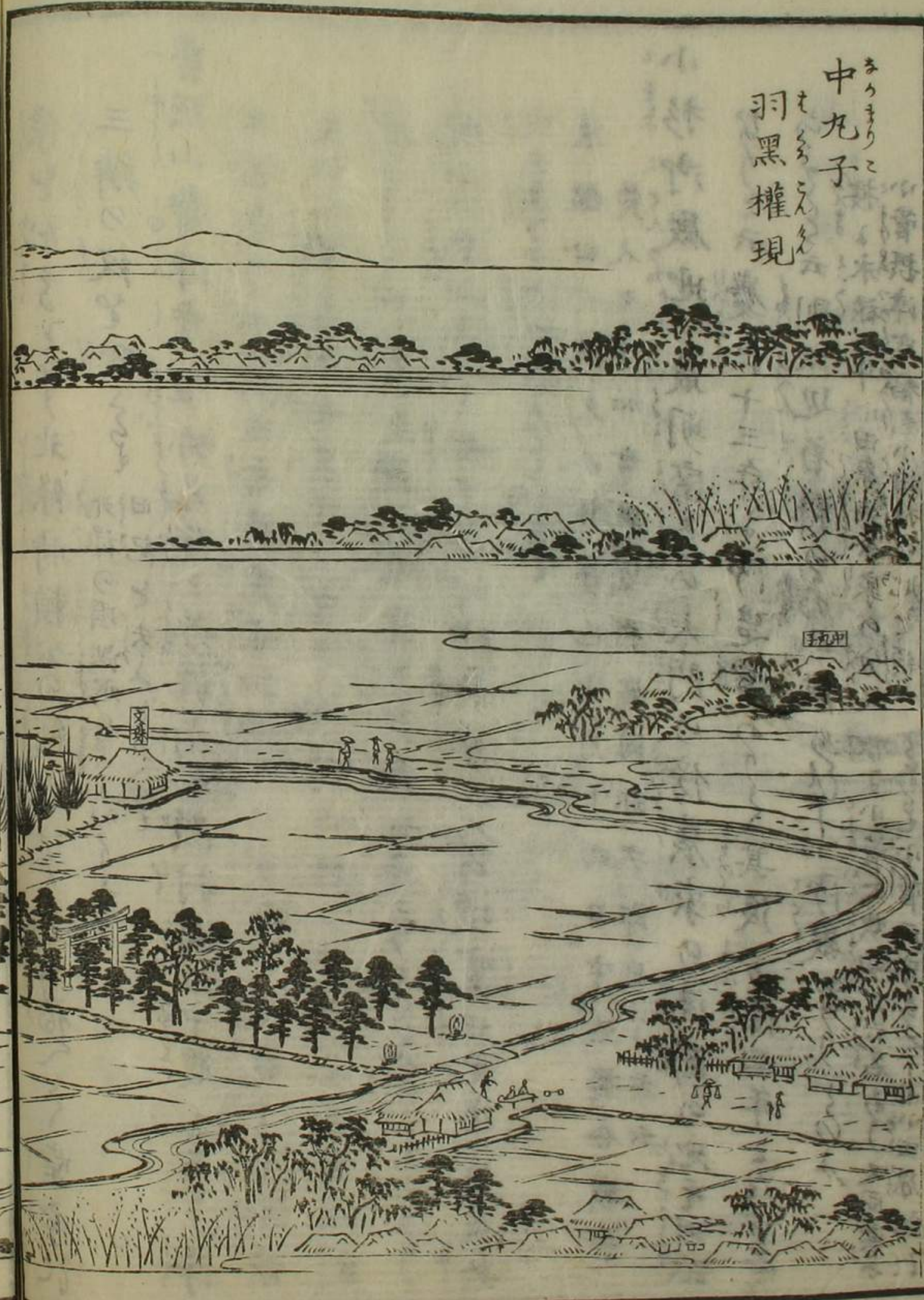
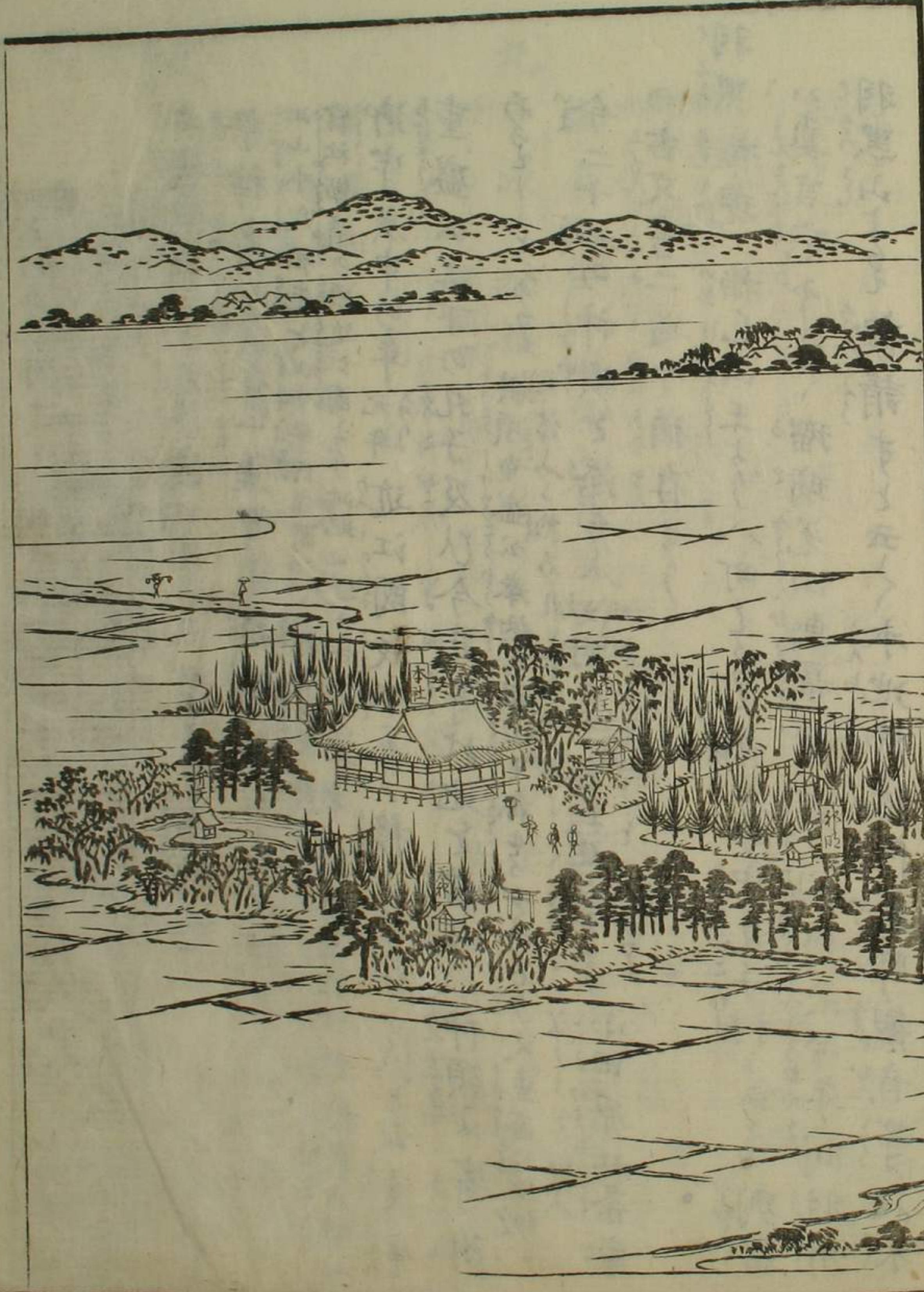
道與准后











中九子  
羽黒權現



大永四年正月十三日上杉の家臣大田源六郎謀反を起し小田原へ相  
図を定め氏綱伊豆相模を拜卒せしむ江戸の城に上杉修理大夫朝興居  
て敵をまかり居たり居たり敵を討つむ武略なすふ必しりとて品川小杉へ  
山王権現社 上丸子渡口より五町を隔て西南道より左の小路より

祭神大己貴命一座なるを祭礼ハ六月十四日神主山本氏奉祀を  
此山本氏祖先を山本平内左衛門と稱せ古相傳人皇三十代欽明天皇の  
當社勸請の頃近江國より此地に移り住むるなり  
御宇庚申の年 元年近江國坂本より移しありと云 後平  
重盛公上下の丸子及び今井等此地を當社の神領に寄附

其項重盛公奉納の短刀と稱するものあり又重盛公の印と  
云傳つた物あれと今秘しとすなりと云  
今二十石の神領を添へて文明八年當社焼亡あり 小田原北条家  
の古文書二通今猶存せり

羽黒権現 稻毛山王より八町を隔て南の方中丸子村より別當  
ハ真言宗より瑠璃光山無量寺と号相傳天正年間羽州  
羽黒山より勸請すと云く本地佛弥勒茶師觀音等此木

像を安置す行基大士の作なりと云く  
追あは江戸に住より年久しく中風の病に侵され 軀不遂し竟に非人と  
なりし此所彼所より歩行其頃當社に在りし其時甚しく早く難治しと名を  
一日山伏一人來り告て曰く汝此社殿にありし其時甚しく早く難治しと名を  
海と改むしとあり病全快せしむるあり亦海と号く同四年乙未正月十日當社の  
神の靈が朝夕神前へ香花神燈を懸けし生涯此神を報しありと云く此  
地あり朝夕神前へ香花神燈を懸けし生涯此神を報しありと云く此

華表の額に羽黒大権現と書せしを朝鮮國雪峯の筆と云  
丸子渡口 相模街道より其邑上中下に分れり  
西より橋本郡に屬せり永祿二年北条家の分限帳に上丸子の地千葉慶所領  
とあり又下丸子ハ荏原郡に屬し川より東より下丸子ハ布施善三といふ人  
領する所と書し同書に云

東鑑曰 四年庚子十月十日以武藏國丸子庄賜葛西  
三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但  
不申其實為御給構自他所招青女之由言上云云

田國雜記 ぬりこの里ありと云く  
本路のありし里よりかきとりしを多くうれし  
羽林といふありと云く  
道與后



概々回國雜記  
まうこの里とありふり東海道鞠子驛と混  
々れとも記し城とあり丸子のつとあり此記の浦  
のり此浦とありあつとありこの里鞠子驛と混  
鎌倉より記せしめて此記のり



